

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ハイスクールD×D

俺はロリハーレムを作ってやるぜ!!

【作者名】

967

【あらすじ】

これは1人の男が間違っつて殺され、ロリハーレムを作る為に神様転生せれる。変態の記録である。

これは酷いっと思っています。

b y 作者

転生します

「……………んっ……………」

俺が目を覚ますとそこは真っ白な空間が広がっていた。

俺は周りを見てみるがやはり何も無い。

俺は立ち上がりどうしてここにいるのかを思い出す。

「……………あっ!」

思い出した。俺は確か学校を帰る途中殺人鬼に襲われて死んだんだった。

「でも何で俺生きてんだろ?てかやっぱ何でここにいるか分かんねーし!誰か居ねーのかよ!」

俺は叫びながら周りを見るが人なんてどこにも居ない。

俺ってここで一生独りぼっちなの?

え?嘘だよな?そこはテンプレで転生してくれるんじゃないの?まさかここが地獄なの?閻魔大王様素道りで地獄に来ちゃったけど大丈夫なの?てか神様早く来いよ!何で来ねーんだよ!まさか神様は焦らしプレイが好きなのか!なら仕方ないね。

「そんな趣味はないわ!」

後ろから突っ込みが入る。

はあやっとな来たか、どんな奴だ?一発殴ってやらねば!

そう思い振り返ると、フリフリのドレスを着た幼女がいた。

「俺と結婚して下さい!」

「何でそうなるー」

だってしょうがないじゃないか可愛いんだもん。結婚したいと思うのは仕方ない事じゃないか。」

「か、かわいいーって……………／／／／」

はっ！心の声がつい出てしまったようだ。まあ仕方ないね。それぐらい可愛いんだもん！prprprしたい

「この変態がああああー」

そう言っって幼女がどこから出したかわからないがハリセンで俺の頭を叩く。こんな幼女に叩かれるんなら俺はMにもなれるね！

「ひひひひー」

神様が逃げるように俺から距離をとる。

ふふふ、照れてるのかな？かわいい

「照れてないわー」

あれ？今は声に出して無いのに何でわかったんだ？

「それは私が神だからよー」

「なるほど納得だわ。それにしても神様って何でそんなかわいいの？キスしてもいい？てかもうここで俺と結婚しよ」

「もう話が進まないじゃないか！少しは黙っててー」

「ひどい！俺は神様に愛を囁いているだけなのに！」

そう言つと神様が頭を抱えて出す。

そんな神様もかわいい

「はあ……。ここまで疲れる奴は初めてだよ！」

「それじゃあ初めて記念に結婚しよー！」

「もう黙ってって言ってるでしょー！」

「わかったよ。神様をこれ以上困らせる訳にはいかないし。」

そう言つて俺は黙る。

「はあ……。やっと話が進められる。もうここで約1000字使ってるんだよー！」

「神様メタいですよ。」

「はあ……。私疲れてるのかな？」

「神様疲れてるの？俺に何か出来る事ない？」

「疲れてるのは貴方の所為よ！兎に角貴方は黙っててくれればいいから。」

神様が疲れたようにしている。ちょっと興奮し過ぎてしまったようだ。これからちゃんと神様の言つこと聞いてこう！そして話終わったらプロポーズしようー！（・・・）（キリッ）

「……………もう突っ込まんからな。」

「もう神様様のいけずー！」

「……………。」

ほんとに突っ込まなくなった。詰まんないな。

「……………神様これからちゃんと聞きますから何か喋って下さい。」

俺は土下座をする。これをすれば大抵の人が許してくれる。

「はぁ……。わかったからもうボケないでね。そうじゃないとおじさんの姿になっちゃうぞー！」

神様がいい顔でこっちを見てくる。

な、なんだって？こんなかわいい幼女がおっさんになるだと……………。それはなんとしても避けなければ。

俺は真剣な顔で神様の顔を見る。

「……………よし、やっと話が出来そうね。とりあえずすいませんでした！」

神様が土下座をしてきた。しかも顔をこすりつけて、

「神様顔を上げて下さい。そんな綺麗な顔を擦りつけてはいけません！傷でも付いたらどうするんですか！その前に何で俺に謝ってるんですか!？」

「ほんとに貴方を相手にすると疲れます。……………それで私が貴方

に謝った理由は間違って貴方を殺してしまったからです。」

神様が申し訳無さそうにそう言うてくる。

そのシュンっとした顔もかわいいな。

はっ、こんなこと考えてると神様がおっさんになってしまっ！真面目にしないと。

「間違って殺した？」

よし！真面目な対応が出来た。これで神様がおっさんになる心配は消えた！

「それも聞こえてるけどね。」

「……なん……だと……。」

しまった。神様は俺の考えている事が分かるとういうのを忘れていた。ちくしょー！これで神様がおっさんになってしまっ。

よし、死のう！こんな幼女が見られただけでも本望だ。

我が人生に一遍の悔いなし！

そして俺は徐ろに自分を首を締める。てか、一回死んでるのに死ねるんかな？どうなんだろう？

「もうわかったから！おっさんにならないから話をさせて！」

「貴方は神様ですか？」

目の前の幼女から後光が見える。まるで神様みたいあ、神様だったね。

「やっぱりお前死んでみる？」

「神様やだな。もう巫山戯ないからそんなドスの効いた声出さないで下さいよ。」

神様が強面のおっさんに負けなくらいのドスの効いた声だった。神様を怒らせると怖いね。注意しないと。

「それでさっきの続きだけど、本当は貴方を殺した奴を殺すつもりだったけど、手がすべちゃって貴方を殺してしまったの。」

「大丈夫ですよ。俺は怒ってませんし、誰にだってミスはあります。それに死んだ事で神様にも会えましたしね！」

「／／／／／」

神様が照れてる。もうかわいいな

「兎に角！貴方には転生してもらいます！」

転生？あの二次小説でよくある転生かな？

「そう。その転生！」

もう心を読まれても驚かなぞ。俺は日々進化しているからね。それはいいとして転生か。もしかして、

「神様！もしかして、願い事を3つ叶えてくれるとかはありますか？」

「うん。そのつもりだけど。」

「あー、1111までテンプレ通り。やってみて3つの願いか。何だしまじ

「……………?」

「神様3つの願い事決まりました。」

「どんな願い事？」

「まず1つ目はfortissimoに出てくる芳乃零二が持っている能力『復元する世界』ってできますか？」

「わかった。やるよ。2つ目は？」

「俺の魔力を無限にして欲しいんです。」

「わかった。それで3つ目は？」

「3つ目は……………いつでもここに来れるようにして欲しいんです。」

「え？」

神様が何を言ってるかわからないような顔をしている。

（これは説明が必要ですか） （ニヤリッ）

「俺は神様にいつでも会えるようにして欲しいんですよ。」

「……………なんでそんな願いなの？もっといい願い事あるでしょ！不死身とか不老不死とか！」

「神様。テンパりすぎてその2つ殆ど意味一緒だからね。そんなお茶目な神様もかわいいよ（・）（・）bグッ！」

「なんでそんな事が言えるのよ!」

なんでそんな事が言えるかって?それは、

「それは、俺が神様の事が好きだからに決まってるじゃないですか!」

「っ!」

「俺は好きじゃない相手に!」まで言いませんよ。それに3つ目の願いは神様が好きだからいつも会いに行くために必要なんです。大好きな人と一緒に居れないのは寂しいじゃないですか。」

「それは!.....。」

「だから俺は3つ目の願いは絶対変えません。」

「.....わかった。3つ目の願いも叶えるよ。」

よかった。もし断られたどうしようかハラハラしていたよ。俺は神様の方を見ると神様の顔が赤いどうしたのかな?

「神様顔が赤いけど大丈夫ですか?」

「.....大丈夫だから。」

そう言って背中を向ける。もしかして!

「神様!」

俺は一瞬で神様の前に行き、

「神様熱でもあるんですか？無理せず休んで下さい！俺は適当に転生しよう〜」

「熱じゃないから、離れて！顔が近い！」

そう言っているがますます顔が赤くなって行く。これは熱どころでは無い！何かの病気なのか？俺は病気には詳しくないがこれはやばい早く医者を見つけ無ければ！

「スタッフー！スタッフー！」

「貴方は何を言ってるの？」

神様が呆れた顔で言ってくる。

「え？ここにスタッフ居ないの？」

「なんでスタッフが居ると思った！」

「こんなかわいい子が一人で居るはずないじゃないですか！どこかにプロデューサーが居るのが当たり前でしょ〜」

「もうかわいい、かわいい言っな！」

「それは出来ない〜！」

「なんでよ〜！」

「言わないと俺が死んでしまう〜！」

「もう死んでしまえ！」

神様が渾身の突っ込みが入る。よし、これだけ元気だったらもう大丈夫だろう。俺は神様から離れる。

「それじゃあ貴方に行ってもらう世界はハイスクールD×Dの世界よ。」

ハイスクールD×Dの世界か。確かあれは小説だったよな。友達がパワーインフレが凄いつて言ってたけど読んで無いから知らないんだよね。

まあ『復元する世界』があれば余裕だけだね（笑）

「わかりました。」

「それじゃああそこの扉の向こう側がハイスクールD×Dの世界と繋がっているからあそこから入ってね。」

そう言っって神様が指を指す。俺は指の指す方を向くとさっきのまでは無かった黒い扉があった。

「わかりました。あそこから入れればいいんですね。」

そう言っって俺は扉がある方へと歩き出す。

すると後ろから走ってくる。音が聞こえ振り向くと、

「んっ!？」

神様の顔が間近にあった。俺はびっくりして声をあげようとしたが声が出なかった。唇が塞がれていたからだ。もちろん神様の唇で。俺は頭が真っ白になってしまった。前の人生は人と付き合った事が無い俺はキスなんて初めてだ。それが今はどうだ！こんなかわいい

幼女とキスなんて出来てしまった。これって絵柄的に犯罪臭がする。幼女を誘拐して無理矢理キスしてるって見られても可笑しくないんじゃないか？だか大丈夫だ！神様からキスしてきたんだもん。俺は無罪だ！ああキスってこんな甘いものなんだな。

「……………ぷはっ。」

俺達は数秒間キスをしたただけだったが物凄い時間がたったような気がする。

「……………神様？」

「……………そ、その……………私からのプレゼント。……………これかもここにきてくれる？……………」

神様がもじもじしながらそんなことを聞いてくる。

な、なんだなこのかわいい生物わ？こんなかわいい生物他に居るのだろうか？否、断じて否！居るはずが無い！居たら俺がお持ち帰りをする。浮気じゃないよ。俺はハーレムを作ろうつとしてるだけだから！もうそのままハイスクールD×Dの中に連れ込んだじゃおうかな！

「勿論来るよ。大好きな神様！」

それがそう言つと神様だ俯いて何かぶつぶつ言っている。

「……………し……………なた……………好き……………」

「神様なんて言った？」

「……………私も……………貴方が……………好きよって言ったのよ！……………」

まさかあの神様がデレた。しかもあんなに顔を赤くしてかわいいな！これは男として一発言つとかないとな！見とけよお前ら！これが男気だ！

「俺も好きだよ。よかった俺と付き合ってくれませんか？」

おいほらそこー！さっきまで結婚結婚言ってた奴がへたれて付き合っつて言ってるよM9) ^ ^ (プギャー!!とか言っつなー！

やっぱり愛のある結婚をしなくちゃね！そうじゃないとすぐ離婚しちゃうからね！だから始めは付き合っつから始めないとね。決してへたれた訳じゃない。ホントダカラネ。

「……………はい。」

そして俺達は引き合っつようにまたキスをする。
今度は十秒くらいだったが一時間に感じられた。
彼女ができるっつて最高—————！

「それじゃあ行くね。」

そう言っつて俺は扉に向かう。そしてふと思っつ。

「そう言えば神様の名前っつてどんな名前なの？」

そう。俺は神様の名前を知らないのだ！これは由々しき事態である。彼女の名前を知らない彼氏が居てたまるか！

「私には名前がないの。よかったら名前付けてくれる？」

「じゃあ『』でー！」

「……………ゆき？」

「そう。その真っ白な肌とその真っ白な髪まるで雪みたいだったからそういつ名前にしたんだよ。気にいらない？」

「うん。凄く嬉しい。……………雪。私は雪。」

雪は凄く嬉しそうに自分の名前を呼んでいる。気に入って貰ってよかった。さておきそれじゃあ俺の名前を教えてあげようかね。多分知ってると思うけど。

「雪。俺は黒羽隼人。これからよろしくね。」

「うん。これからよろしくね隼人。」

雪が満面の笑みでこっちに笑顔を見せてくる。

ああかわいい！こんなかわいい子が俺の彼女なんて夢みたいだ。もう死んでもいいや。

「ダメよ！絶対死んじゃダメだからね！」

雪が涙目になりながら抱きついて来た。こんな子にそこまで言われたら死ねないな。何が何でも生きなくてわ！

「大丈夫だよ。雪を置いて俺は死なないから。」

「本当？約束よ！」

「うん。約束。」

そして俺達は指切りをする。神様も指切りするんだ。

「指切りげんまん嘘ついたらハリセンボン飲ます。指切った!」

ハリセンボン? 針千本じゃなくてあのハリセンボン? あんなの飲めねよ! てか口にはいねーよ!

俺が珍しく突っ込みをする。

「クスクスクス。」

雪は楽しように笑っている。ああ幸せだなあ!

俺は今度こそ扉の前まで行き、もう一度雪の方を見る。

雪は寂しそうにこっちを見ている。クッソ! そんな顔で見られたら行けないじゃないか! 俺は雪に、

「大丈夫。すぐ会いに行くから! それまで待ってて。」

「うん。待ってるから!」

うん。これでよし!

雪が笑顔になった事を確認して俺は扉の向こう側に行く。

これから起きることにワクワクしながら。

「二天龍、別に倒しても構わないのだろう？」

俺が目を開けるとそこは森だった。周りを見るがただ森が広がっているだけ。

「やけに暗いな！」

そう思い上を見上げるとそこは紫の空があった。紫？

はっ！まさか世界が滅んだというのか？世界が核戦争をした。地球の末路か！こうしてはおれん、一刻も早く世界を救わなくてわ！

『なんでいつつも隼人はそうなんですか？ポケ倒さないといけないんですか？』

「当たり前だ！俺からポケを取ったらロリコンしか残らんぞ！」

『ロリコンでも充分インパクトはありますよ。』

「そうかな？ロリコンは世界共通だからインパクトは無いだろ。」

『ロリコンは世界共通ではありません！ロリコンは変わった性癖ですよ。』

「そんなん馬鹿な……。っでどこどこ？」

『あなたって人わ。ここは冥界悪魔や堕天使がいる世界です。』

「なんほど、それであれは何？」

俺が指を指す方にはでかいドラゴンが2匹とそれに群がる人がいた。

『あれ？ちょっと待って下さい……………。』

「雪どろした？」

『すみません。送る時間軸を間違えました。』

「また間違えたの？そんなお茶目な雪がかわいいよ」

『／／／／／……………ありがとうございます……………。』

雪がデレた。雪がデレると段々と声が小さくなっていくのがすごいかわいー！はぁもう会いたくなって来た。もうあっちに住んじゃおつかないかな

「それで俺はどうしたらいいの？ここに住めばいいの？ここに雪との愛の巣を作ればいいの？もう子供つくっちゃっ？」

『もう隼人は何を言ってるのよ……………その……………まだ……………子供は早いかな？……………嫌じゃ……………ないけど……………／／／／／』

グハッ!?なんて威力だ！まさか俺のハートダイレクトアタックを仕掛けてくるだど!?もうやめて、もう俺は雪にメロメロよ！しかも嫌じゃないとこういう事は……………少ししたらOKと言っ事だ！よし、これで勝つる！

生きてて良かったあああああ！雪愛してらううううう！

「うん。それじゃあお互いの理解が深まったらしよっね。」

『……………うん。……………／／／／』

やっぱり雪は俺を殺しにかかってきている。そんな反応されたら俺、萌え死んじゃうじゃないか。萌えつきちゃう！

『……………話を戻すわね。本来送るはずだった時間軸にもう一度転移させるから。それでね、転移するのに後1日必要なの。それまで待つてもらえる？』

「雪のお願いだ！それぐらいお安い御用だ！」

『ありがとう それじゃあ準備をするから1日会えないけど待つてね……………。転移させた後……………そ、その……………「褒美上げるから。」』

「雪と会えないのは悲しいが待つてるよ。雪も頑張つてね。」

『うん！私頑張るから待つててね』

そう言つて雪の声が聞こえなくなった。

はぁ雪つてかわいいな。最後のあなたの為に頑張るねって言うてくれた時は死にかけた。え？そんな事言つてないって？近いこと言つてたからいいんだよ！

さて暇になつてしまった。どうしよう？やる事なんてないしな……………あっ！有るじゃないか。この能力を使えば暇つぶし出来るのでは？よし、そうしよう！相手はあ……………あのドラゴンだよし、行こう。思い立ったが吉日だ！

そして俺は二天龍をボコリに行ったのだ。

そして今そのドラゴンの前に浮いています。なんで浮いてるかつ

「フハハハたわいない。」

「やはり人間の戯言気にする事でもなかったか。」

「おーい。俺は無傷だけどうっ。」

「！！！！！！！！」

俺が爆炎の中から無傷で出てくると、赤と白の他に周りの人達も驚いていた。なんでだろうっ？まあといあえず、

「ねえねえ。自分達が倒したと思った相手が無傷だったって知った時どんな気持ちだった？ねえねえ今どんな気持ち？ねえねえ今はどんな気持ち？m9(^(^(プギヤー！！」

「貴様なぜあの攻撃から生き延びれた！」

「たかが人間如きが防げる攻撃ではないはず。」

「知りたい？でも教える馬鹿が居ると思う？でも俺は教えちゃう！」

「やっぱり教えんでいいー！」

まさか赤と白に突っ込まれるとはこ奴らなかなかやるな。だがそれを無視して言おうじゃないか！

「まあそう言わずに聞いてよ。……………ねえ今は期待した？もしかしたら本当に教えてくれると思った？そんな訳無いじゃん。ねえねえ今どんな気持ち？NDKNDK」

「貴様は許さん！」

そう言っただけで赤と白がこっちに向かって来る。さて、『復元する世界術式固定』の確認は済んだし、『こいつらはもういいか。そろそろ終わらせてあげよう。これ以上弄ったら相手のSAN値が下がっちゃうからね。うん。俺って優しい』

赤と白がその鋭い鍵爪で俺を引き裂こうと腕を振り下ろすが届かない。

「何？」

赤と白がもう一度腕を振るが又しても当たらない。

「何が起こってるんだ？」

赤と白が何が起こってるのかわからないのかただ我武者羅に腕を振る。なぜこんな事になっていいのかと言つと、俺の能力『復元する世界』を発動しているからだ。この能力はあらゆる現象を過去の状態に復元する能力。この能力を使って赤と白の腕がギリギリ届かないとこまで移動させてるからだ。それを知らずに赤と白が腕を振る。まるでおやつが取れない犬のようだった。

「なんで届かないんだ！」

「さて、もうお前ら飽きたから、もう倒れていいよ。」

そう言っただけで俺は魔力を右手に溜めて行く。

「なんだその魔力？人間がそんな魔力を持っている筈がない！」

「現実見るよ。現に俺が存在しているぞ。」

「クソオオオオオ！」

「ぶっ飛びやがれ！」

『神討つ拳狼の蒼槍』 フェンリスヴォルフ

そう言っただけ俺は赤と白を巻き込む魔力パンチを喰らわす。

まるで核が落ちたようなきのこと雲が立ちのぼる。爆心地には瀕死の状態の赤と白がいた。あれを喰らったらもう動けないだろう！なんせ俺の魔力無限、インフィニティなのだ！だから俺の力もインフィニティだぜ！そんなことを考えていると、蝙蝠の羽を生やした赤髪の男が俺に近寄って来る。

「……………君は何者だい？見たところ人間だけど？」

「……………」。

やばい変なイケメンに絡まれた。俺は今はお金持って無いんです。なんなら飛び跳ねましょうか？それで証明できます。えっと俺が何者だってどうしよう？本名を名乗る訳にはいけない。だが颯爽登場したからにはカッコつけなくては、

「俺はただの魔法使いですよ。」

「……………魔法使い？」

やってしまった。これでは俺が中二病の痛い奴だっと思われてしまう。てかもう手遅れだ。赤髪のイケメンが引いている。多分このイケメン(こいつこんな年にもなってまだ中二病発症中かよmg)(^

^ (^) プギヤー!! () とか思ってるよ絶対! いかん、ここにいたらまたぼろを出しかねない。 () は c o o ー に去らねば。 あの人の様に、

「それじゃあ俺は c o o ー に去るぜ〜!」

よし、決まった。これは本家を抜いたはずだ! これからは俺の時代だ!

「……………ちょっと待って」

ガシツ。

え? なんで腕掴むの? そこは c o o ー に去れせよ。これじゃ本家を抜くどころか本家の人に m 9 (^ ^) プギヤー!! されるよ。やめてこれ以上俺は中二病をさらけ出したくないんだよ!

「放してください。」

「お礼がしたいんだ。良かったら来てくれないかな?」

そんな甘い言葉に乗る俺じゃないわ。もし俺に俺がしたいっていうなら、雪以上の幼女を連れて来いよ!

そう思っていると後ろから声をかけられる。

「…見つけた。」

俺は、次は誰だ? と思い後ろを見ると黒髪のごスロリの幼女がいた。

「……………我、お前がほしい。」

「ああ俺もだよ。俺も君がほしい。」

俺は赤髪イケメンの前から一瞬でゴスロリ少女の前に行く。これは雪以上かもしれん。こんなかわいい子がこの世界に居るなんてこの世界最高！にしても、このゴスロリはけしからん！前が殆ど全開じゃないか！胸もバツテンのシールを貼っただけだし、これはいかん！こんなハレンチな格好は俺の前でしか許さない！ああかわいい。雪は表情がコロコロってかわいいがこの子は無表情で無口な子だね。だがそれがまたいい！これだからロリコンはやめられないぜ！ロリコン最高!!!

「っ！オフィス！」

そう言っつて赤髪イケメンが攻撃しようとしたが、

「てめえ死にたのか？」

それを俺が許す訳が無い！俺が全力の殺気と魔力を出したら怯えてしまった。まあ攻撃しなかっただけでもよしとするか。もし攻撃してこんなかわいい子に傷でも負わしたらここに居る全員を殺すことだった。

にしてもかわいいな もうお持ち帰りしたい。

「君はかわいいね。ちょっとあっちでいいことしょ？」

「……………」

俺が犯罪者のセリフを吐いたのにも関わらず着いて来てくれるだっつて!?!これはお持ち帰りOKって合図だよな？あっちで安安ことや「こんな」としてもいいんだよね？

おつとここでR18の展開を考えた奴は心が汚いぞ。それをするのはもっと後だ。それまで自分達の妄想でなんとかしろ！

「ちて、じゃあ行いっか」

「……………ん。」

そう言って彼女を担ぎ、音速で元いた場所に戻る。
ああ早くこの子をprprしたいな。

〜side〜
???

「……………ちっきのはなんだったのか？」

「二天龍を倒したかと思ったらまさかオフィスが現れて何処かに行ってしまった。訳がわからない。彼はなんだったのか？そもそもなんで人間がこんな所に？ますます謎が深まっていく。」

「サーゼクス大丈夫だったか？」

「アジユカか。僕は大丈夫だよ。」

「それにしてもあの人間何者だった？」

「わからない。でも魔法使いとは言っていたよ。」

「魔法使い？」

「ああ。けどあんな魔法見たことない。」

「……………今はそんな事は後回しだ。まず、あの赤龍帝と白龍皇の封印が先だ。」

「わかった。今行くよ。」

サーゼクスは仲間たちの方に向かう。

(彼とはまた会えそうな気がする。その時、何者が聞かなくては。) そう思い封印の手伝いをする。

そしてサーゼクスはあの魔法使いの事を『最強の魔法使い・ウィザード』と命名し、聖書に名前を残したのだ。

隼人がこれを知るのは千年後だった。

「これは健全な恋愛です。ホントだよ」

俺は今元いた森にいる。ゴスロリ幼女を抱えて
.....あれ？これって誘拐？もしかして俺って遂に犯
罪者になってしまった？それはまずい返して来ないと。だが返した
くない。もう俺責任とってこの子を幸せにしないと！

そんな事を考えていると、無言で服の端を引っ張るゴスロリ幼女。
何このかわいい仕草死んでしまっつ。

「どうしたの？」

「.....我とグレートレットを倒して。」

「グレートレットって何？」

「グレートレットは次元の狭間いるドラゴン。我、次元の狭間に戻り
たい。」

「帰れないの？」

「グレートレットが今いるから。」

「よし、倒そうか！君みたいかわいい子を追い出すドラゴンなんて
殺してしまおう！てか生きてる事が苦痛な事をしよう！それより君
ほんとかわいいね そういえばお母さんとお父さん？ご挨拶行かな
いといけないから。」

「.....ずっと我、1人。」

「それってもう御家族はいないってこと？.....ごめん俺知らなく

て。」

「違う。我産まれた時からずっと1人。もう千年以上生きてる。」

「千年以上も!？」

「…ん。我、ドラゴンだから。」

ドラゴンってそんな生きるのか?ていうか、こんなかわいい子がドラゴンだって?もしかしてドラゴンってみんなロリなのか?けどさっき倒したドラゴンはおっさんの声だったし、この子だけなのか?まあいい。でも、

「1人なんだよね?次元の狭間に帰っても寂しくない?」

「私の帰るところ、次元の狭間だけ。」

帰る場所がそこしかなくて帰ったとしても独りぼっちじゃ可哀そうだろ!こんなかわいい子が独りぼっちだなんて俺が許さん!これはロリコンとしてでは無く一人の人間として言っているんだ。分かってくれ!

「じゃあ俺が君の帰る場所になるよ!」

「……………?」

首をカクンと傾けて、頭に?マークが出ているような格好をしてくる。この子何者だ!俺のドツボに入る仕事をポンポンと繰り出してくるんだ?もう俺の好感度MAXまでいちゃってるよ?もうちょっとで天元突破しちゃってメーター振り切れちゃうよ?いいの?もう襲っちゃっぞぞ!

「つまりね。次元の狭間に戻るより、俺といた方が面白いと思うよ。俺も君と一緒にいたいしね。」

「……お前といたら楽しい？」

「勿論！一人でいたら出来ないことも沢山してあげるよ！グフフフフ……。」

「……ん。我、お前という。」

「ありがとう。俺は黒羽隼人って言うんだ。君はなんて言うの？」

「我、オフィス。」

「オフィスちゃんかかわいい名前だね。」

「我、かわいい？」

「当たり前だよ！もうキスしたいくらいかわいいよ！」

「隼人は我とキスしたいの？」

「勿論！あわよくばそれ以上の事も……っ!？」

俺はびっくりした。オフィスが俺にキスしてきた。そつと触れるキスだった。………どうしてこうなった？

「な、な、なんでいきなりキスしてくるんだ！気持ちよかったじゃないか！ご馳走様です。」

「……？隼人、我とキスしたいって言った。」

「言ったけど不意打ちは駄目だ！俺の理性が壊れてしまう！だからもう一回キスをしよう！もう少して理性が壊れそうなんだ！この勢いのまま逝かせてくれ！」

「うん。」

そして俺達はまたキスをする。

バキッ！ 理性が壊れる音

「オーフィスー！！」

「んあっ……………あぁ……………」。

ピンポンパンポンー。只今、R15の規制を超える行為をしているため、しばらくお待ち下さい。皆様には多大なる迷惑をおかけしました事を心よりお詫び申し上げます。

「すまないオフィス。責任は取る。」

「ん。大丈夫。私も気持ちよかったから。」

「もうかわいいな」

俺はオフィスを抱き締める。オフィスも満更でなないらしくおとなしく抱かれている。やばいまたムラムラしてきた。もう1回戦やつとくか？俺はオフィスともう一回やるつとすると、

「お前は何をしてんじやあああ」

頭に凄い衝撃がはしる。振り向くとそこには目一杯に涙を溜まらせた雪がいた。やばいこの状況はやばい。付き合う宣言したすぐ後にもう浮気してんだもん。しかもヤチャったんだもん。これは殺される。

「ゆ、雪「これは違うんだ!」

「何が違うって言うのっ!」

「そ、それは……………」。

「私のことなんて本当はどうでも良かったんでしょ!私よりその子可愛いもんね。私の私よりその子の方が……………っ……………グスっ。」

遂には雪が泣き出してしまった。

俺は慌てて雪の方へ走る。

「ごめん雪。そんなつもりじゃなかったんだ。」

「さっきから言い訳ばっかじゃん!こんなんじゃ一人だけはしゃいでた私が馬鹿みたいじゃない!」

「ごめん。でも、俺は雪が1番好きなんだ!信じてくれ!」

「だったらあたしだけを見てよ!他の子なんて見ないで!」

雪が泣きながら訴えてくる。俺の事をそんなにも思ってくれていたらなんて思いもしなかった。だが俺には口リハーレムを作るっていう夢がある。そこだけは譲れない。

「ごめん雪、それは出来ない。」

「っ!」

「俺はハーレムを作るっていう夢がある。でも、これだけは覚えてて

ほしい。俺はどれだけ好きな人を作っても、1番好きなのは雪だ！どんな事があるつと雪が1番好きだ！」

「そんなの信じられる訳ないじゃない！」

「どつしたら信じてくれる？」

「そ、それは……………」

「俺は雪に信じてもらえるならなんだってする。」

「……………じゃ、じゃあ……………あの子にした事よりもっと凄い事してよ……………／／／／／」

「え!？」

え？どういうこと？え？まさか雪が俺の事を誘っているのか？しかもあんなに顔を赤くして。よっぽど恥ずかしいかったんだね。かわいいな。愛おしいな。やっぱり1番は雪だ。俺に新しい命をくれて、俺の彼女になってくれて、心から思っよ。

「わかったよ。雪、愛してる。」

「隼人……………ん……………」

ピンポンパンポンー！またしてもR18的な行為が行われているため、しばらくお待ち下さい。重ね重ね皆様には多大なるご迷惑をかけしまい申しわけありません。心よりお詫び申し上げます。

「今日はもう無理だわ！もう出ない。」

「……………はあ……………はあ……………はあ……………」。

「雪大丈夫？」

「……………はあ……………はあ……………うん……………大丈夫……………」

雪もこれ以上動けないようだ。まああれだけしたら、誰だって動けなくなるわ。それより、

「それより雪、なんでこの世界に居るんだ？神様の仕事は？」

「辞めちゃった。」

「辞めたって。どうして?」

「そ、それは隼人と一緒に居たかったから……………」。

まさか俺と一緒に居るために神様の仕事を辞めてまで来てくれたのか?もう言葉にならない。俺泣きそうだよ。雪を好きになって本当に良かった。絶対幸せにする。もう絶対離さない。

「ありがとう雪!やっぱり雪が1番かわいいよ!」

「……………」ありがとう……………」

そんなに顔赤くして本当にかわいいな雪は!世界でいや、歴史上で1番かわいい!

「隼人、我は?」

オフィスが気になったのか聞いてくる。さっきまで寝てたのになんで話の内容知ってるん?そんなの答えは決まっているだろう!

「オフィスも勿論かわいいよ」

俺はオフィスの頭を撫でながら言う。

「……………」

撫でるのが気持ちいいのか、目を細めている。こころなしか、顔も赤い。

「じ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜。」

雪が羨ましそうにこっちを見てくる。ヤキモチを妬いているのか。かわいいな雪も。俺は雪にこっちに来てと合図をして、雪の頭も撫でる。

「えへへへへ〜。」

雪が嬉しそうにしている。それだけで俺は幸せになれる。両手に花状態だ。いや、両手に幼女だ！なんだこの響きは？すごく、犯罪臭がする。まあそれは置いておこう。とりあえずこれからの事について雪と話し合わねば。

「それで雪、転送の準備できた？」

「あ！忘れてた。大丈夫、もう転送できるよ。」

「それはよかった。それでね、お願いがあるんだけど。」

「お願い？」

「オフィスも連れて行けない？」

俺はオフィスを抱っこして言う。まるで人形みたいに、無表情で動かない。これは本当は人形じゃないか？と疑ってしまっ雪だった。

「できるけどなんで？」

「この子帰る場所がないんだよ！だから俺はこの子居場所になるって決めたんだ。この子を一人置いて行けない！だから頼む。」

「やけにその子に拘わるわね。やっぱりその子の方が！」

「俺は雪が1番だよ！確かにオフィスも大好きだけどそれより雪の方が好きだよ。なんなら転送した後にでもまたする？」

「……………わかった。……………その……………転送後は……………お願いします……………」

「任せろ（・・・）bグッ！」

「我もしたい。」

「じゃあオフィスも一緒にしようか。」

「うん。」

「やっぱりそのk」雪が1番だよ！愛してる』えへへへ〜」

なんか雪がちよろい。だがそこがかわいい！転送せれた後、むちやくちやにしてあげるね もちろんオフィスも

「それじゃ転送するね。」

雪がそう言った直後俺達は淡い光に包まれる。

その光が段々と強くなり、眩しくなって目を瞑った時俺達は1000年後に転送された。

目を開けるとそこは家の中だった。しかも結構広い。

「此処は？」

「ここは私達の家よー！」

雪がドヤ顔で胸を張っている。そんなところは見かけ道理なんだね。それよりこの家は防音対策はしてるのだろうか？俺達の夜の営みが他の人に聞こえてはいけない！てか、聞かす訳にはいかない！聞いていいのは俺だけだ！

「雪、この家って防音対策ってしてる？」

「え？なんで？」

「そりゃあ、雪と『自主規制』したり、『放送禁止用語』したりした時声が外に漏れたら大変じゃないか!!」

「もうそんなこと大声で言わないで！」

「これからするから気になって仕方が無いんだよ！」

「大丈夫だからしてるから、そんな恥ずかしい事言わないで！」

やっぱり恥ずかしくて雪もかわいいな　もう我慢ならん！
……………そう言えばオーフィスはどこ行った？見当たらない
けど？

「雪、オフィスがどこ行ったか知らない？」

「あの子なら、二階に行きましたけど。」

「そっか。それより雪。オフィスの事をあの子って言うじゃなくて名前で呼びなさいー！これから家族になるんだからー！」

「けどあの子は私の恋敵です。気を許す訳にはいかないんですー！」

「でもこれからは家族なんだし名前で動かない！それに言ったろ。俺は雪が1番って。結婚するなら真っ先に雪の所に行くよ。」

「隼人……………」

「だからオフィスの事名前は呼んであげて。」

「うん。」

「うん！そんないい子には飛び切りの事をしてあげないと」

「それって……………もしかして。」

「考えてる通りだと思うよ。雪もHになって来たね。俺は嬉しいよ」

「もう隼人！」

「ごめんごめん。それじゃオフィスを探しに行くか。」

「オフィスを？」

「そうー」

「なんで？」

「それは後でのお楽しみで」

そう言って雪の手を引つ張って二階に行く。

「ちょっと待ってよー」

雪は俺に引つ張られる用についてくる。手を握って。

はあ雪の手ちよう柔らげえ。ずっと握っていたい。

俺達は二階へ到着した。これまた広い。部屋も6個ある。俺は部屋の多さ驚いているとどこからか声が聞こえてくる。どこからだろう？そう思い俺は音のする方へ歩き出す。雪も聞こえたのか、俺と一緒に歩き出す。音へ近くいていると、

「……………んっ……………んあ……………くっ……………」

そんな声が聞こえてくる。俺は耳を疑った。この声は間違いなくオフィスの声。だが、聞こえてくるのは、すぐくっばい声が聞こえてくる。聞こえてくる場所は二階の1番奥の部屋からだ。雪も聞こえたのか顔を赤くしている。俺達は部屋の扉を少し開けて中の様子を見るとそこには、

「……………んっ……………んはっ……………はあはあ……………んあ……………」

○ナニーをしているオフィスの姿があるじゃないですか奥様！たぶん俺達の『自主規制』を見て、オフィスも熱くなってしまったのだろう。雪も顔を真っ赤にさせて見ている。これはなかなか見れない光景だ！すっかり目に焼き付けておかねば！俺は目を録画モー

ドにしてオフィスのオニーを見る。しかし、なんて子なんだ。あんな物事を知らなさそうな顔をしながらとんでもないこと知ってるとは。俺嬉しい。俺はHな子も好きだよ！

「隼人今、変なこと考えなかった？」

雪がジト目でこっちを見てくる。馬鹿な。もう神様じゃないのになぜ俺の心の声がわかる？

「隼人はすぐ顔に出るから。」

またしても読まれてしまった。俺ってそんな顔に出てるかな？正直自覚はないんだけど。

「…さっきから何してるの？」

俺達はビクツと飛び跳ねて声のする方を向くとさっきまでオナ○ーをしていたオフィスがたっていた。しかも途中だったのか服は着崩れているし、またからは『NGワード』が垂れている。すごくエロいです。

「いやーオフィスがどこにいるかなって探していたんだよな雪！」

「う、うん。そう探していたの。」

俺達は苦し紛れの嘘をつくが、

「嘘。さっきから我のことずっと見てた。」

あっさりとバレてしまう。それにしても気づいてオナニ○していたのか!? なかなかの強者だな。もう襲いたいよ！けど先に雪を襲

わないと。すると、服の裾をくいくい引つ張られる。振り向くと雪が俯いた状態で俺の服を掴んでいた。

「……………は、隼人。……………私、もう我慢出来ない。」

雪が俯いたままそんなことを言う。その時俺は気付いた。気付いてしまった。雪の股から『NGワード』が垂れていた事に！俺は息を呑む。

「雪……………」

「お願い……………シて……………」

バキッ 再度理性が壊れる音

「雪、愛してるぅぅぅぅぅぅー！」

「キャッ……………隼人がつき過ぎ……………あん！」

ピンポンパンポニー！作者を殴って来るので少しお待ち下さい。

「なんだお前は？」

「読者様を代表して殴りに来ました。」

「なんで殴られないといけないんだよ！」

「それは読者様にあんだけ今からやるよ雰囲気作っておいて内容は全カットってどついつ事ですか？」

「そんなの自分で妄想しろよ！」

「そう言つと思つたから殴りに来たんです。」

「やめろこつちに来るな————！ギャアアアアアつ！！」

大変お待たせしてしまつて大変申し訳ありませんでした。作者との話し合い（物理）の結果明日中にはR18版を出すことに決定致しました。本当に読者の皆様には多大なるご迷惑をおかけしました事を心よりお詫び申し上げます。

「さて、雪今は原作で言つとどこらへんなんだ？」

「原作が始まる一日前よ。隼人は原作の主人公の友達で同じ学年よ。しかも隼人は『ロリコン紳士』って言われて人気だから。」

「それって違う意味で人気なんじゃないの？」

「そうでもないよ。ロリコンだけど、優しいくて、いつでも相談に乗ってあげる人って事にしてあるから少なくとも嫌われてないよ。」

「……………そうなんだ。」

本当に嫌われて無いかそれって？だって最初にロリコンが付いてるせいで嫌われるんじゃないのか？わからない！……………まあいつか！俺には雪とオーフィスが居るし。寂しくなんてないし。本当だからな……………グスン。

「雪俺の膝の上に乗ってくれる？」

そう言つと雪は恥ずかしがりなも、俺の膝の上に乗ってくる。俺は雪を思いつきり抱き締める。雪の顔がますます赤くなってる。めっちゃかわいい 意地悪したくなってくる。

俺はその後ちよつと悪戯を雪にしたら怒られてどこかに行つてしまった。

「さて、明日から原作入りか。どんなかわいい子に出会えるかな？楽しみだ。」

俺はまだ見ぬロリっ子達に思いをさせながらオフィスに抱きつ
くのだった。オフィスかわいいprpr。

新たなロリっ子発見じゃあ！

さて俺は今駒王学園に向かっているのだが、どこにあるかわからない。よく転生ものじゃ、主人公は何故か知っていて普通に登校出来るのになんで俺は着けないだよ！てか、駒王学園の生徒を見かけない。なんでなんだ？俺、駒王学園の生徒の後を付けて学園に行くつもりだったのにこれじゃあどうしようもねーじゃん！雪〜。なんで俺にその設定の記憶付けてくれなかったんだ。『ごめん忘れてた』ってかわいく言ったから許してあげるけど、雪ってドジっ子なのかな？だがそれもかわいい……………ってこんな事してる場合じゃなかった！何としても学園に行かなくては！ここは恥をしのんで人に聞こう！周りを見てみるが人がいない。まるで人扱いがされているみたいだった。

「なんで人がいねーんだ？」

すると向こうから、金髪ツインテールの少女が歩いてくる。

「ねえねえこれら俺と遊ばない？」

俺は走って少女の所まで行き、ナンパをする

「あんだ誰っスか？」

「そんな事どうでもいいじゃないか！さあ俺と遊びに行こうよ！そして最後には一緒に愛を育もうじゃないか！」

「なんなんすかこいつ！気持ち悪いっス！」

そんな引かなくても良いじゃないか！俺はただ君が好きただけな

の「、これじゃ駄目なら、

「お菓子買ってあげるから遊びに行こう。ね？」

「私を子供扱いするなっス！」

うーん。これくらいの子だったら普通はついて来る筈なのなんだから？それじゃもっと上の物にしよう。

「俺の体を好きにしていから遊びに行こう！」

「お前は変態っスか！そんなもんお菓子より要らないっス！」

「そんな馬鹿な……。orz」

オフィスや雪なら、喜んでくれるのになんでこの子には喜んでくれないんだ？世の中は不思議でいっぱいだ！

「さて、お巫山戯はここまでにして聞きたい事があるんだがいい？」

「さっきまでウチからかわれていたんスか！」

「そんな事は無いよ！俺は君が欲しいだ！出来ればずっといて欲しい。」

「こんなロマンの欠片もない告白は初めてっス！殺すっスよ！」

「ごめんごめん。だから殺さないで。まだ俺は君と付き合っただけで無いからねーそれまで死ねないよー！」

「もうさっきからなんなんっスかこいつ！」

からかい過ぎてなんか涙目になってきている。さて本当にここでまですして学園に行かなくては遅刻してしまう。教えてくれるかな？

「本当に「めん。それでちょっと聞きたいんだけど、駒王学園ってどう行けばいいかわかる？」

「ほんとムカつく人間っスね！駒王学園なら、ここを真っ直ぐ行って、突き当たりを右に行って、ケーキ屋の前を右に曲がったらあるっスよ」

ムカつくとなんと言っていたが親切に教えてくれた。もしかしてこれが所謂ツンデレなのか!?まあこれで助かった、

「ありがとう。助かったよ！」

「それじゃあさっさと行けっス！」

「それじゃあね。また会ったら何か奢るよ！」

「2度と会いたくないっス。」

「そんな事言わずにさっ。」

「わかったから早く行けっス！」

俺はもう1度お礼を言い学校に向かう。そういえば、あの子の名前聞いて無いな。今度あったら聞いと。」

「それで着いたのだが……………俺のクラスどこ？」

いや、だってそうだろ！今までの記憶が無いのにどうやって自分の教室に行くんだよ！無理ゲーだろ！雪お願いだから助けて。元神様だろ？

『隼人どうしたの？』

「……………俺疲れてるのかな？頭の中から雪の声が聞こえる。雪が恋しくて遂にイかれたのか？」

『大丈夫よ、隼人はイかれてなんて無いよ。私が直接隼人の頭の中に話しかけているんだから。』

「そうだったのか。それで俺はどここのクラスに行けばいいんだ？生徒に聞くわけにもいかないし。」

『ちょっと待ってて。隼人に関する設定を送るから。』

『送るっどじやって？』

『じじやって。』

すると頭が痛くなりその場に蹲ってしまふ。頭にすごい量の情報が流れ込んでくる。やばい目眩がする。吐きそう。だが、すぐに頭痛は引き、頭に自分のクラス、交友関係、その他諸々の情報が追加されていた。

『どじじいちゃんど出来た？』

「ああ大丈夫だよ！これで普通に振る舞える。」

『よかった。また失敗したらどうしようかと思った。』

「大丈夫。雪なら成功するって信じてたから。ちなみに失敗してたらどんなになってたのかな？」

『ありがとう隼人。失敗してたら……………』

「雪続きは？」

『え〜とね。落ち着いて聞いて欲しいんだけど、もし失敗してたら、隼人の記憶が全て壊れて廃人になってたかも。』

「ふあっ!？」

え？そんな危険な行為だったのあれ。よかった成功して。雪って結構ドジだから失敗してたかもしれない可能性があるから本当に成功してよかった。頼む雪。ドジっ子もかわいいがそんな危険な行為をドジっ子がしちゃ駄目だ！死人が出る！

『もしかして怒った？』

雪がシュンとした声で言うてくる。ぐっそんなかわいい声出されたら怒れないじゃないか！まあ起こる気いんだけどね！

「怒って無いよ。けど今度からはそんな危ないまねはしないでね。」

『うん。わかった。』

「よろしい！それと雪！」

『何？』

「俺に記憶をくれてありがとう。帰ったらいっぱい抱きしめてあげるよー」

『……………うん……………よろしくお願いします……………』

もうかわいいな！今すぐ帰って抱きしめてあげたい。

「うん。それじゃあね雪。」

『じゃあね隼人。……………約束守ってよね……………』

「うん。絶対守るよ。」

そう言っって雪の声が聞こえなくなった。もうかわいいな雪わ。流石俺の彼女だわ。もう一生離さないからな！何があっても一緒にいてやる！

さて、教室に行きますか。俺の教室は確かこのクラスだったな。

「隼人君おはよう。」

「隼人おはよう。」

「ロリコンおはよう。」

「俺の彼氏が来たようだ。どうだ朝の挨拶で俺とヤラナイカ」

クラスみんなが挨拶をしてくる。いいクラスメイトだな。よし今日も1日頑張るか！え？突っ込まなのか？だって、言わないでくれ。俺もどう処理したらいいのかわからないんだ。

「おはようみんな。」

それだけ言って席に着く。横を向くと男子生徒3人がエロ談話をしている。こいつらは、ただの変態達だ。まず、イツセーはいつもおっぱいおっぱい言っているただのエロガキだ。ちなみに俺の友達だ。ただのエロガキなのだが根は優しいやつだ。次は、松田だ。こいつは女性の恥ずかしい写真を撮るのが好きな変態だ。『セクハラパラッチ』とも呼ばれている変態だ。もう一度言おう。こいつは変態だ。最後に元浜。先に言うておこつ。こいつも変態だ。眼鏡を通して女性のスリーサイズを測る才能を持つ変態だ。『スリーサイズスカウター』とも言われている。そんな奴らだ。女子からは絶大なる不人気をもらっている。まあ日頃からおっぱいおっぱい言ってる奴と、恥ずかしい写真を撮る奴と、自分のスリーサイズを勝手に測る奴が人気が出るはずは無いな。お前も変態じゃないか！だって？確かにロリコンだが俺はこいつらとは違って相手の嫌がる事はしないんだ！だから、

「隼人君、ここの問題わからないんだけど教えてくれる？」

「うん。いいよ。どこがわからないの？」

「えっとね……………ってとこだけどわかる？」

「ああそこね。これはね……………って事なんだよ。」

「ありがとう隼人君。」

「いえいえ。もしまたわからないところがあったら聞いてくれ。俺もわかる範囲で教えるから。」

「／／／／／……ありがとう。そうするね。」

そう言っただけの子が戻って行った。

見たかこれが俺の実力だ！決して女性のお願いは断らず、手伝える事はなんでも手伝う。このお陰で、俺は結構人気者だ。告白されたことも何度かある。まあ俺はロリコンだからほとんど振ったんだけどね。それに今俺には雪っていうかわいい彼女がいる。だからこれからも全て振るつもりだ。

「隼人……」

イッセーが俺を恨めしそうにこっちを見てくる。

「なんで隼人はモテるんだよ！ロリコンなのに！」

「俺はお前らみたいに変態じゃないからな。それにお前らは顔はいいんだから、少しは黙っていればモテると思っぞ……」

「クソ……イケメンに言われても全然嬉しくねえ！」

「それに俺達はもう引き返せないところまで来てしまったんだ！もう突っ切るしかない……」

「隼人貴様俺達に喧嘩売ってんのか！」

「ほう、俺と喧嘩すると。なかなか威勢がいいんだな。」

バキバキボキッ

「……すいませんでした……」

「分かればいいんだよ。分かれば。」

「く、いつか見返してやる！」

「何か言ったか？」

「いえ、何も。」

そう言つて3人は自分の席に戻つて行つた。それからすぐにチャイムが鳴りHRが始まつた。

授業が終わり今は昼休みだ。俺は昼飯を食べに今屋上に向かつている。別に友達がいらないから屋上で食べる訳ではない。ただ、今日は屋上で食べたい気分なのだ！俺が屋上の扉を開けると白髪の小柄な女の子がいた。

「小猫ちゃん、今日もかわいいね。こんな所でどうしたの？」

「げ、黒羽先輩。」

「げ、とはひどい言い草だね」

この子は塔城小猫。一年生だ。学園のマスコットキャラクター的な存在だ。それくらいかわいくて人気もある。基本無口で無表情。なんかオフィスとキャラが被ってるがオフィスとは違ってまだ表情が読める。オフィスは全然表情変わらないから読めないんだよね。

「先輩こそ何しに来たんですか？」

「昼ご飯をここで食べようかと思つて。良かったら小猫ちゃんも一緒に」

「いいえ、お断りさ。お菓子あるけど」一緒にさせていただきます！」

ふふふ…小猫ちゃんが甘い物好きなのは知っているのだよ。なんで甘い物持つてるかって？それはロリコンだからだよ！ロリコンはお菓子というアイテムは必須なんだよ！じゃないと小さい子が寄って来ないじゃないか！だから持つてんだよ！みなまで言わすなよ。わかれよ！

「黒羽先輩さっきから黙ってますけどどうかしたんですか？」

「じめん。ちょっとぼろっとしてただけだから。じゃああそこで食べよっか！」

「はい。」

そう言っただけ俺達は近くにあつたベンチに腰を下ろす。弁当箱を開くと玉子焼き、ウインナーといった定番のオカズが入っている。勿論俺が作った。前の人生でも一人暮らしだったからよく料理してたから味には自信がある！

「先輩のお弁当って誰が作ってるんですか？」

「勿論俺が作っている。」

「え？親が作ってないんですか？」

そういえば俺親いないけどどう説明したらいいんだろ？死んだって事にしたら話が重くなるしな。そうだ！海外にいる事にしよう！

「海外に長期出張してるんだよ。だから俺が弁当作ってるんだよ。」

「そうだったんですね。ちょっと貰ってもいいですか？」

「大丈夫だよ！はい、あ〜ん。」

「これは何ですか？」

小猫ちゃんが冷めた目で「っ」ちを見てくる。

「王子焼きだけど？嫌いだった？」

「そうじゃなくて。なんであ〜んが必要なのか聞いてるだけです。」

「それは俺がしたいからだよ！」

「私はしたくありません。」

「それじゃあいらない？」

「ぐっ」

小猫ちゃんが「っ」ちを睨んでくる。そんなに食べたかったのかな？それじゃあ普通にあげようかな。

「「じめんね。普通にあげ」わかりました。」え？」

「あ〜んをしたらいいんですよね。」

「え？ほんとにいいの？」

「はい。ひと思いにやっつけてください。」

まさか小猫ちゃんにあくんが出来るとは最高じゃないか！滅多にない事だ。しっかり脳に刻み込んでおかねば。

「それじゃあ行くよあくん。」

小猫ちゃんが口を開いて待っている。なんてかわいいんだ！そのまま違う物をくわえさせたい！………おっと邪な考えは捨てなければ。そして俺は小猫ちゃんの口の中に玉子焼きを入れる。

「どう小猫ちゃん？美味しい？」

小猫ちゃんは数回嚙んだ後、驚いた表情をし口の中の物を飲み込んだ。

「はい。すごく美味しかったです。あくんが無ければもっと美味しく頂けたのですが。」

「口にあって良かったよ。俺的には眼福ですごく良かったよ！」

「変態です。」

小猫ちゃんが軽蔑してる目でじつちを睨んでくる。

「じめんじめん。つかわいくてね。」

「やっぱり先輩はロリコンです。」

「うん。俺はロリコンだよ！だから小猫ちゃんが好きなんだよ！」

「好きっていえばどうにかなると思っているんですか？」

「いや、思って無いよ。けど絶対小猫ちゃんの事を振り向かせてやるって思ってるから覚悟しておいてね！」

「そんな日が来ればいいですね。」

小猫ちゃんは慣れたかのように軽く流した。これは結構難関だな。どう落としたらいいのかわからないや。けど絶対落としてやるからな！それは置いといて、

「小猫ちゃん。言っただお菓子あげるよ。」

「ありがとうございます。シュークリームですか。これってお菓子ですか？」

「俺はスイーツもお菓子って呼んでるからね。だって一緒じゃん！どうちも甘いし。」

「黒羽先輩今の本気で言ってます？」

小猫ちゃんが静かに聞いてくる。だがオーラがすごい事になっている。あれ？俺何か言っちゃいけない事言ったけ？どうしてこんなに怒ってるの？

「え〜と、小猫さんなんで怒ってるのかな？」

「黒羽先輩そこに正座してください。」

「え？なんで？」

「いいから座ってくださいー！」

「は、はいー」

小猫ちゃんから有無を言わせぬオーラが出されており、俺は素早く正座をした。

「黒羽先輩あなたスイーツとお菓子は同じだと言いましたね。」

「うん。言ったけど。違うの？」

「違います！そもそもスイーツとお菓子では食べるタイミングが違います！まずスイーツは……………」

それからは小猫ちゃんが壊れたかのようにスイーツとお菓子の違いについて説明されて説教もされた。遂には甘い物のいいとこまで話始めた。俺がちよっとでも姿勢を崩すと

「ちゃんと聞いているんですか？」

とハイライトが消えた瞳で睨んできて崩そうにも崩せない状況。しかも下はコンクリート。もはや拷問である。結局昼休みいっぱい説教されて終わった。足が痺れて歩けなかったのは秘密。

「それじゃあ今日はこゝまで。明日もちゃんと投稿するように！(誤字にあらず)」

最後に先生が訳がわからない事を言っていたが、授業が終わり、放課後になった。俺は部活道に参加してないのですぐに帰る事にす

る。

俺が帰っていると廊下の向こうからイッセー、元浜、松田が女子剣道部に追われていた。また何かしたのだろう。俺は無視して帰ろうとするよ、

「あ、隼人助けてくれ！」

イッセーが俺を見つけ助けを求めてきた。やばい関わりたくないけど無視したら追いかけて来そうだし、ここは助けてやるか、

「助けてやるよ。」

「「「本当か？」」」

なんか元浜と松田も増えていたがまあいい手間が省けた。

「ああ。女子剣道部のな。」

「「「え？……裏切ったなあ隼人ー！」」」

「裏切る？俺は最初からお前らを助けるなんて言ってない！お前らが勝手に都合よく解釈しただけだよっ！」

そう言っただ俺は3人をしばき倒した。

「隼人君ありがとっ手伝ってくれて」

「どっつって事無いよ。でも、こいつらには俺が殴り倒したから罪は軽くしてやってくれ。」

「隼人って本当に優しいんだね。」

「そうでも無いよ。けどいつらがまた同じ事をしたらその時は思いっきりやっつけていいから。」

「うん。そうするね。今日はありがとう。」

「いえいえ。それじゃあね。」

俺が手を振ると女子剣道部全員が手を振替してくれた。なんか嬉しいね。前の人生はこんな事は無かったからな。ほんとこの世界に来て良かったよ。

帰宅している途中、見覚えのある人に出会った。

「また会ったね！」

「げ、朝のキモイ奴。」

「そこまで言わなくてもいいじゃん。」

出会ったのは朝、道を教えてくれた金髪ツインテールの少女だった。そういえば次はあったら奢るって約束してたんだ。まさかこんなに早く会えるとは思っていなかった。これは運命なのか？俺とあの子は運命の赤い糸で結ばれてるのか？

「どこでまた会えたんだし、どこかでお茶しようよ。」

「いやっスー！」

「次はあったら奢るって言ったらわかったって言ったじゃないか。」

「もうわかったっスよ。」

「うん。それじゃあ近くにある喫茶店に行くっか。」

そうして俺達は喫茶店に行くことにした。

喫茶店に入り席に着いた。

「なんでも頼んでいいよ奢るから。」

「じゃあこのメニュー全部っス。」

「うん。大丈夫だよ。けどよくそんな食べれるね。俺は無理だよ。」

俺は笑いながら少女に話しかける。

「へ？じよ、「冗談っス！」

少女があからさまに狼狽える。嫌がらせで言っただつてもりがひらりと躲され、反撃されたのだ流石に狼狽えるか。まあメニュー全部ってオーダーをされても大丈夫だが。なぜなら俺の財布の中には百万円入っているからだ！雪が一生お金に困らないように馬鹿げた金額に設定した為、今俺の財布は諭吉でパンパンだ。

「冗談だったのか。それじゃあ何にする？」

「うちこんな場所初めて来たっスから、何頼んでいいからわからないっス。」

「そうなんだ。じゃあこのチーズケーキはどう？ここの店の看板メ

「ニューなんだけど。」

「じゃあそれにするっスー！」

「じゃあ後は飲み物だけだね。紅茶なんてどうかな？ここは紅茶も美味しいんだよ。」

「じゃあそうするねっスー！」

「ごめんね。全部俺が決めたみたいで。」

「大丈夫っス。そのかわり美味しく無かったら許さないっスよ！」

「うん。そこは安心していいよ。ここは美味しくから。すみません！注文いいですか？」

そう言って店員を呼ぶ。

「はい。」注文をぶっごぞ。

「このチーズケーキを2つと紅茶が1つとブラックコーヒーを1つでお願いします。後は紅茶とコーヒーは食後でお願いします。」

「かしこまりました。それでは少々お待ちください。」

そう言って店員が厨房にオーダーを通しに行った。

「それじゃあ料理が来るまで何か話そうか。」

「けど何を話っスか？」

「とりあえず自己紹介をしない？俺達お互いの名前知らないだろ。」

「確かにそうっすね。」

「じゃあ俺から、俺は黒羽隼人って言うんだ。君は？」

「ウチはミッテルトっていうっす！」

「」の子はミッテルトって言うのか。見た目どつり外国人の人なのかな？それにしても日本語が上手だけど。

「ミッテルトちゃんって外国の人？にしても日本語上手だね。」

「ウチをちゃん付けて呼ぶなっす！」

「ごめんごめん。なんか付けたくなちゃって。」

「腹立つっすー！」

「本当にごめんね。もう呼ばないから。許してミッテルト。」

「なんか名前呼ばれるだけで腹立つっす！」

「俺にどつしると!?!」

「死んでくれっす。」

「ミッテルトは酷いな。」

「だから名前呼ぶなっす！」

「けどお前って呼ばれるよりかは、マシじゃない？」

「それはそうっすけど」

「だから名前で呼ばせてよ。俺の事も名前で呼んでいいから。」

「わかったっす！隼人。」

やっぱり名前で呼んでもらえるのは嬉しいね！しかもこんな美少女に言われるともう好きになってしまっつ。いや、俺はもうミッテルトの事が好きになってるんだ。愛を囁きたいが、今のミッテルトはガードが硬い。だからどこかで崩れたところ確実に攻めて行かなくてわ。すると店員が料理を運んで来た。

「お待たせしました。こちらがチーズケーキになります。」

店員が俺達の前にチーズケーキを置いてお辞儀をし何処かに行ってしまった。

「これがチーズケーキっすか？」

「そうだよ。もしかして初めて食べる？」

「そうっす！めっちゃ美味しそうっすね！」

「そうなんだ。ここの店のチーズケーキはね。味が濃厚でチーズケーキだけでも美味しいんだけど、このイチゴのソースの酸味が合わさるとすごく美味しいんだよ！」

俺はミッテルトに熱弁をした。俺はチーズケーキが好物でチーズケーキにかける思いが違っ！昔家でもよく作っていた。ここの店

は今まで食べたチーズケーキの中でも一番に美味しいものだった。それをミッテルトにも味わって貰いたい。

「そうなんっスか？食べて見てもいいっスか？」

「どうぞ。」

そう言つとミッテルトはチーズケーキを小さく切り口の中へと運んで食べた。すると目を見開いてこっちを見てくる。

「これめっちゃくちゃ美味しいっス！」

「だろー！」

「本当に美味しいっス！」

ミッテルトはすごいスピードでチーズケーキを平らげた。だが物足りないらしく、こっちを見てくる。

「ほしいっ。」

「ほしいっスー！」

目をランランに光らせてこっちを見てくる。もうかわいいな！なんか子犬みたいだな。

「はい。あげるよ。」

「ありがとうっスー！」

そう言つてミッテルトは俺のチーズケーキを食べ始める。俺は店

員にコーヒーと紅茶を出してもらおうように伝える。その間ミッテルトは笑顔でチーズケーキを食べていた。

「ミッテルトは笑顔の時間が一番かわいいな！」

「っ!?……………ありがとうっス……………」

ミッテルトは恥ずかしがりなもチーズケーキを食べていく。その顔は真っ赤になっていたが、夕日の為、分からなかった。暫くして、コーヒーと紅茶が来た。その時にはミッテルトもチーズケーキを食べ終わっており、開いた皿を下げてもらった。

「……………」

「……………」

少しの時間何も話さなかった。けど、決して気まずい訳ではない。互いに夕日を見ていた。俺はコーヒーを飲み終わり、ミッテルトを見ると、まだ飲んでる最中のようだ。ふと目があったが顔をそらされてしまう。まだ嫌われてるのかな？これはなかなか難攻不落だな！そして暫くしてミッテルトも紅茶を飲み終わり、店を出ることにした。

「今日は楽しかったよ！」

「ふん！まあまあ楽しかったっス」

「それは良かったよ！」

「それで……………もし良かったら……………また一緒に来たいっス。」

「え？」

「ち、違うっス！また奢れって事っス！別に一緒に食べたいなんて思っただけっスからね！」

あれ？これってツンデレ？俺いつ落としたんだ？だがラッキーだ！これで俺のハーレムがまた一人増えたぜ！しかもツンデレと来たか。ポイント高いね！最高だよ！だが、まだ告白するのは早い。もう少し時間をかけなくては。

「うん。また会えたら一緒に食べよう！俺の奢りで。」

「ほんとっスか？」

「うん。」

ミッテルトの顔が一気に明るくなっていく。何この子めっちゃかわいいんだけど！

「そ、それじゃあまたっス！」

そう言ってミッテルトは走り去ってしまった。行動全てがかわいいなミッテルトは！絶対俺のハーレムの中に入れてやる！そう思い家に帰った。

のだが、

「隼人から女の匂いがする。」

そう言って雪がジト目で睨んでくる。

「それは、学校で色んな人と関わったからね。それりゃあ付くдар。」

「違う。他の女と比べて2人だけ匂いが濃い。」

そう言って雪が睨んでくる。遂にはハイライトが消えてしまった。すげー怖いがそれより、なんで嗅ぎわけられるのかが不思議でたまらい。雪は犬なのか？

「もしかして私のこと嫌いになったの？」

「それは無い！前にも言ったる。俺はハーレムを作るのが夢だった。だから他の子にも手を出すけど、どんな事があるつと俺は雪が1番好きだよ！決して嫌いにはならない。俺が他の子に手を出したからって嫉妬してくれるのは嬉しいけど、決して嫌いになったわけじゃないから。安心して。それとも俺の言葉は信じられない？」

「ありがとっ隼人。隼人の言葉はいつも信じてるよ。でも時々、不安になるの。本当に隼人は私のこと好きなのかなって。」

俺はそれを聞いて雪を抱き寄せキスをする。

触るだけのキスをするとうすぐ唇を離し、

「大丈夫。俺は雪が1番だから。ずっと1番だから。だから元気出して。」

「うん。」

そう言っって雪が俺に背中を預けて来る。俺はそれを受け止め抱きしめる。雪の頬はほんのり赤くなっており、嬉しそうな顔をしていた。すると服の裾が引っ張られ振り向くとオフィスの壁が立っており、

「我也好き？」

オフィスの壁が少し不安げな表情で言ってきた。

「当たり前だろ！オフィスの壁も好きだよ！こっちはおいで。」

「ん。」

オフィスの壁は嬉しそうな顔をしてこっちに来る。俺は雪と一緒にオフィスの壁も抱きしめる。オフィスの壁もほんのりと赤くなるが無表情だった。

「2人とも好きだよ！絶対離さないからね！」

俺はより一層強く抱きしめる。雪とオフィスの壁も嬉しように微笑んでいる。この生活は毎日が楽しいな！転生して本当に幸せだよ！

雪「うん言っではなんだけど、俺を殺してくれたありがとう。俺は心の中
で雪にお礼を言っつて雪達を抱きしめていた。」

ミッテルトside

「やばいっス！アイツの事が頭から離れないっス！なんで？また会う
約束もしてしまっつたっス！本当にウチはどうしたんっスか！」

と悶えていたが、そこに上司であるレイナーレが降り立った。

「ミッテルト貴方をお願いがあるの？」

「何っスか？」

「こいつを殺して欲しいの」

そして一枚の写真を渡される。中身を見るとそこには隼人が写っ
ていた。

「な、なんでこいつを殺すんっスか？」

ミッテルトは焦りながらもレイナーレに聞くが、レイナーレは酷く
冷たい顔で、

「貴方がこの人間と食事している所を見たわ。」

それを聞いた瞬間ミッテルトの血がさぁっと引いた。見られてい

たってもしかして、

「もしかしてこいつを殺す理由って……ウチのせいっすか？」

「ええそつよ。貴女、あの人間の事が好きなんですよ。けど私達のような至高の堕天使が人間と結ばれる訳にはいかないの。だから貴女の手で殺しなさい！好きな人くらい最後は自分の手で殺してあげなさい。その方が相手もいいでしょう。」

「そんな……。」

ミッテルトはその場に崩れ落ちてしまう。

「もし出来ないなら、他の奴に殺してもらおうから。」

それだけ言ってレイナーレは飛び去って行った。その場に残されたのはミッテルト1人だけ。ミッテルトは写真を抱きしめ、ただ泣く事しか出来なかった。

俺の逆鱗に触れた奴は死ぬぜ！

「……………んっ。」

俺が目を覚ますと両腕が重く痺れていた。右にオフィス、左に雪が俺の腕を枕にして寝ていた。はあ雪もオフィスも寝顔かわいいね！俺はそつと二人にキスを落とすし起こさないようにベットを出た。

時刻は5時。起きるにはまだ早い時間なのだが、主婦は朝早く起きないと学校に間に合わないのだ！だって雪とオフィスに家事やらずと酷い事になる。雪はドジっ子だからやらすと何か壊すからダメ。オフィスは無知過ぎて家事が出来ない。だから必然的に俺がやることにした。

まず俺は昨日洗濯機にかけた洗濯物を干しに行く。干し終わったら、お弁当作り。献立は前の日に決めている為、朝考えて無駄な時間を使う事は無い！何事も計画的にいかなくては、時間は有料なんだ！無駄な時間を使う訳にはいかない！そんな時間があったら雪とオフィスとでイチャイチャラブラブしてるよ！

お弁当を作り終わり時刻は6時。いい時間になってきたため、俺は朝食の準備をする。今日の朝食は、味噌汁、焼き魚、漬け物、白ご飯といった純和風でいく。日本人はお米食べる！パンも美味しいが俺は断然ご飯派だ！異論は認めん！

朝食の用意が出来たが、雪とオフィスが起きて来ない。俺はしかなく起こしに行く。俺の部屋に入ると二人はお互いを抱き合うように寝ていた。こ、これは！なかなかの絶景じゃないか！幼女二人が抱

き合っているのだぞ！これは脳内保存待ったなしだな！だがこんな事をしている訳にはいかない。朝食が冷めてしまう。俺は雪とオフィスを軽く揺すって、

「雪、オフィス、朝ごはん出来たよ。早く起きて。」

「……………ん。」

「……………眠い。」

雪とオフィスはまだ眠いのか目を擦っている。寝起きの顔もかわいいな、この子達は！

「おはよう。雪、オフィス。」

「……………おはよう隼人。」

「……………ん。おはよう。」

二人は目が半開きままだが徐々に意識が覚醒しているようだ。俺は、早く顔を洗って朝ごはんにするよ。と言って、部屋から出ようとすると、雪に服を掴まれ、

「……………隼人…おはようのちゅうして。」

「我も。」

二人が上目遣いで訴えてくる。ほんとこの子達は俺のストライクゾーンのと真ん中を撃ち抜いてくるな。もう俺は二人にメロメロだよ！俺はまず、雪にキスをする。数秒間だけのキス。俺が唇を離すと少し残念そうな顔をしたが、顔がすぐに幸せそうな顔をする。次に

やっと雪が唇を離してくれた。雪は息が上がっており、肩で息をしている。表情はもう女の顔になっており、朝からハッスルしたくなるが、してたら確実に遅刻する。それは流石にそれは困るんでね。

「雪、オフィス今はダメだからな。」

「……………うん。わかってる。」

「んっ。」

「それじゃあご飯食べよー！」

「うんっー！」

俺と2人は一階に降り朝食をとった。

「隼人の料理はいつも美味しね。」

「うん。美味しい。」

「そうか？そう言われると恥ずかしいな。けどありがとっよー！」

俺は恥ずかしがりなも二人の頭を撫でた。二人も嬉しそうに笑っているいて、ものすごくかわいい。今日は学校サボってずっとイチヤイチヤしていたい！けどそれは出来ない。俺は学生だからな！

朝食を食べ終わり、シャワーを浴び身支度をして家を出ようとする。

「それじゃあ行ってくるね。」

「うん。いってらっしゃい隼人。」

「いってらっしゃい。」

なんかこつゆつ日常が本当に幸せだ。俺は二人に手を振り学校へと向かった。

学校に着き、教室に入ると、ニヤニヤして気持ち悪い顔をしたイツセーが近づいて来た。気持ち悪いのでとりあえず殴っておいた。

「痛ってー！いきなり何するんだよ！」

「お前がキモい顔で近寄って来るからだ！」

「理由それだけ!？」

「それ以外何がある？」

「くそ。だが俺は今、非常に気分がいいんだ。なんでかわかるか？」

「知らんし、どうでもいい。だからそこどけ。」

「そう言わずに聞いてくれよ。」

なんかイツセーが涙目・上目遣いでこっちを見てくる。これが雪だったら今すぐに抱きつくのだが、イツセーがやるとすごいキモいな。吐き気がする。

「わかったから、キモい目で見てくるな！」

「サンキュー。それでな、さっきの話だけど俺に彼女が出来たんだよ

「！」

「すまんイッセー。お前がそこまで追い込まれるとは思わなかった。いい精神科を教えてやるから安心しろ。」

「そんなんじゃねー！」

「もういいんだイッセー。お前はただ疲れてるだけだ。」

「ほんとだって、ほらこれー！」

イッセーがポケットから携帯を取り出し、ディスプレイをこっちに向ける。見てみると黒髪ロングの女性がイッセーと一緒に写っていた。どうやら本当らしい。けどなんでこいつなんだ？こいつのいいところなんて無いの？物好きもいたものだ。

「本当そうだな。とりあえずおめでとじ。」

「ありがとうよ！それで頼みがあるんだがいいか？」

「なんだ？」

「俺デートしたこと無いからどこに行けばいいかわからないから、どこ行ったらいいか教えてくれないか？」

「そんなの自分で考えろよ。」

「考えたけどわからないんだよ。」

「じゃあ彼女と話し合えよー！」

「けどどこでもいいって言ってたし。」

「じゃあ自分の行きたい所に行けよ。他人が考えたデートプランより彼氏が考えたデートプランの方が彼女も喜ぶだろ。」

「それもそうだな。やっぱり自分で考えるよ。ありがとうな！」

「決まったならそこどけ。」

そう言ったらイッセーはすまんと言って自分の席に戻って行った。俺は自分の席に着き、授業が始まるまで寝る事にした。

授業が終わり、今は帰宅している。今日はスーパーで特売をしていた為、両手には買い物袋を下げている。

「持つっスー！」

後ろから左の買い物袋がひったくられる。俺が振り向くとミッテルトが俺の買い物袋を持っていた。

「ミッテルトか。どうしたの？」

「隼人を見かけたっスから話かけたっス！」

「だからって買い物袋取るなよ。」

「だから持つっスー！」

「けど重いだろ。渡して。」

「大丈夫っス！これくらいなんでもないっス！」

本当にミッテルトはかわいいな！こんなに健気な奴はそうはいない。絶対ハーレムの中に入れてやる。これは決定事項だ！

「じゃあこっちに持ってよ。こっちの方が軽いし。」

「大丈夫っスよ！」

「けど、女の子に重い荷物持たせる訳にはいかないからね。ほらこっち持って。」

「ちよっ！」

俺はミッテルトの持つてる買い物袋をひったくり、もう片方の軽い買い物袋をミッテルトに持ってもらう。

「……あ、ありがとっス……」

「大丈夫だよ。」

ミッテルトが下を向き照れている。本当にかわいいな。だがその表情がすぐに曇る。どうしたんだろ？

「ミッテルトどうかした？」

「え？な、何がっスか？」

「いや、表情が暗いと思ってどうかしたのかなって？」

「っ！」

ミッテルトは一瞬辛そうな表情をしたが、すぐに笑顔に戻るが表情が固く無理して笑ってるようにしか見えない。

「ミッテルトほんとにどごうしたんだ？」

「な、なんでもないうっすよ！隼人の勘違いっす！」

「そんな訳ないだろ！じゃあなんでそんな辛そうな表情するんだよ。」

ミッテルトの表情はもう笑顔が崩れて凄く辛そうな表情に変わっていた。

「隼人には関係ないっす！」

「関係ない訳ないだろ！俺はお前の事が好きなんだ！だから俺はお前を助けたいんだ！俺に出来ることならなんでもする。だから何が辛いのか教えてくれ！」

俺はミッテルトに訴える。俺はミッテルトが好きだ！だからあんな辛そうな顔されたら助けたくなくなる。ミッテルトにはずっと元気で、笑顔で居てほしい。だから今のミッテルトの顔は見たくない！

「だったらー！」

ミッテルトが叫ぶと背中から鳥のような羽が生えてきた。

「じゃあ私の為に死んでよー！」

ミッテルトは光の槍を手の上に作り、俺の目の前に来て振りかざした。俺は目をつむり、衝撃に備えるが、いつまでたっても衝撃が来な

い。俺は恐る恐る目を開けると、ミッテルトは目から涙をポロポロと流し、光の槍を振りかざしたままで止まっていた。

「……ミッテルト？」

「うう。…なんで殺さないいけないんっスか。殺したくないっス。」

ミッテルトは光の槍を消して俺の胸に飛び込んで来る。ミッテルトはポロポロを涙を流し、

「いやっス。隼人を殺したくないっス。」

と言ってるだけだった。俺は買物袋を置いてミッテルトを抱きしめる。俺はミッテルトが泣き止むまで抱きしめていた。この時幸いだったのは、周りに人が居なく、この光景を見られなかった事だ。

ミッテルトが泣き止むと、俺達は抱きしめ合ったままで会話をする。

「ミッテルト。なんで俺を殺そうとしたの？」

「それは……………」。

ミッテルトは黙ってしまった。けどこれは聞かなくてはいけない。俺はそいつを殺さねばならないからだ。なぜなら、ミッテルトを泣かせたからだ！俺の好きな奴を泣かせた奴は絶対死刑だ！

「辛いと思うけど言ってくれ。俺がなんとかするから。」

「でも、それじゃあ隼人が危ないっス！」

「大丈夫！俺は強いから。それにミッテルトを泣かせた奴は絶対に許さない！絶対生まれて来たことを後悔させてやる！」

「隼人……………私に隼人を殺させようとしたの『ドスン！』」

ミッテルトが話していると胸に凄い衝撃がはしる。俺は胸を見てみると槍が俺とミッテルトを串刺しにしているのが見える。口から何かが出てきた。たぶん血だろう。

「…ドーナ…シーク…何を……………」

「やはり貴様は奴を殺さなかったか。レイナー様を読み通りだな。レイナー様からもしその人間を殺さなかったらついでにお前も殺せと言われていたんでね。」

ミッテルトはハット帽を被った男と話していた。話を聞く限りこの槍を放ったのはあの男だろう。すると槍が消え、俺達の胸からとめどなく血が流れ始める。

「…ミッテルト…大丈夫…か？」

「…隼人…ごめん……………あたしの…所為で……………こんなになっちゃって……………」

ミッテルトは俺に寄り添うように倒れこんでくる。

「ミッテルト大丈夫か！しっかりしろ！死ぬな！」

「……………ごめん隼人……………ごめん……………ウチも隼人の事……………す……………き……………
だったよ。」

「おい、しっかりしろ！ミツテルト目を開けてくれ！頼むから！頼む……。」

俺は泣きながらミツテルトの頬を叩いている。

「ふん。やっと死んだか。人間なんかと一緒にいようとするからだ！」

俺はそれを聞いて完全にキレた。こんないい子を殺して、しかも殺した理由が俺と一緒にいたって言ったから殺したってこいつ達は言ってるのか！絶対に許さない！簡単には殺さないぞ！

『雪！オフィス！来い！』

俺が叫ぶとすぐに雪とオフィスが現れる。

「隼人急呼んだけど何かあった……ってどうしたの隼人？怪我が出るじゃない……。」

「隼人どうしたの？」

雪とオフィスは俺の心配をしてくれるが今はそんな事をしている暇はない。

「雪、そこに倒れてる子を俺の自宅に運んでくれ。」

「でも、もう彼女は……。」

「大丈夫！『復元する世界』」

俺は『復元する世界』を発動させミツテルトの体を24時間前の体

に戻した。

「な、なんだその能力は？それにオーフィスだと!? 貴様何者だ!」

「黙れ雑魚!!」

「貴様、人間の分際で私を雑魚だと舐めるなよ!」

ドーナシークは俺に向かって光の槍を放つがオーフィスによって防がれる。

「雪、早くあの子を俺の家に。オーフィスはここ一帯を結界を張ってくれ。俺はこいつを殺す!」

雪とオーフィスは自分も手伝わつと言おうとしたが出来なかった。隼人から殺気と魔力が無造作に溢れだし怖気づいてしまっていたからだ。あんなに優しい隼人がこんなに狂気じみた殺気を放つとは思わなかったからだ。

「わかった隼人。けど絶対に怪我しないでね。」

「ああ約束するよ!」

雪は隼人の言葉を聞きミッテルトを担いで転移した。

オーフィスはこの間に結界を貼り終わっており、もうこの空間の中には隼人、オーフィス、ドーナシークしか残ってなかった。俺はミッテルトを傷つけたクソ野郎を睨み付け、

「さあかかって来いよ! 一方的に蹂躪してやる!」

俺はそう叫びクソ野郎に襲いかかった。

これから起こるのは目をつむりたくくような一方的な暴力だった。

俺の彼女がこんなに正妻なわけがない！

「さあかかって来いよ！一方的に蹂躪してやる！」

そう言ってドーナシークに襲いかかる。

「オーフィスが相手なら勝てなかったが、人間相手なら楽なものだ！」

ドーナシークは二つの光の槍を作り、隼人の方に投げつけるが、もうそこには隼人の姿はなかった。

「なっ!?どこに行った？」

「お前の後ろだよー！」

「っ!?」

慌ててドーナシークは振り向くが、隼人はドーナシークに回し蹴りをし、地面に叩き落とす。

「ガハッ!？」

「おいおい。「れくらいでへばるなよ。まだまだ序の口だぞ。」

隼人はドーナシークを踏みつけ、羽を鷲掴みにする。そして、隼人はドーナシークの羽を筆りとった。筆りとった場所から血が溢れるように出ている。

「があああああっっっ！」

ドーナシークは激痛で絶叫する。隼人はそれをものともしないでもう片方の羽も筆りとった。

「これで空は飛べないな！墮ちた天使が羽を筆られて空からも落ちたな。本当に滑稽だな！三下！」

「……………ぐあっ……………き、貴様ああ！」

「まだまだ殺さねーぞ！お前にはまだまだまだ苦痛を味わってもらおう！」

隼人はそう言うとドーナシークの右腕を踏みつぶした。そして次は左腕を踏みつぶした。ドーナシークは激痛の余り意識が飛んでしまっていた。

「……………がつ……………あ……………」

「おい、起きろー！」

隼人はドーナシークの横つ腹を思い切り蹴る。ドーナシークは衝撃で目を覚ます。隼人はそれを確認すると、今度は右脚を踏みつぶす。左脚も同じように潰す。

「た、助けてくれ……………」

ドーナシークは歯をガチガチと震わせながら命乞いをする。それは隼人に油を注いだけだった。隼人はドーナシークを睨み付ける。右手でドーナシークの首を絞め、片手で持ち上げる。ドーナシークは苦しそうにもがくが、腕も脚がない状態ので、反撃が出来ない。

「お前は、ミッテルトを簡単に殺そうとしたくせに、自分が殺されそうになったら命乞いか。巫山戯るなよ!!」

隼人はドーナシークの腹を思い切り殴る。殴った事により肺が1つ潰れドーナシークの口から血を吹き出す。

「……………がはっ!……………た、たの……………む……………助けて……………くれ」

「絶対にお前は殺す!だがまだ死なせないぞ!」

隼人は左手をドーナシークの目のすぐ近くまで近づける。

「な、なにを……………する……………」

「こっすんだよ!!」

隼人は勢いをつけて左手をドーナシークの目に突き刺し、眼球をえぐり出した。

「ぎゃあああああああ!目が…目が……………」

「片方だけじゃあバランスが悪いよな!」

隼人はもう片方の目もえぐり出す。眼球を握り潰しドーナシークの口の中に入れ込む。

「おら!自分の目の味はどうだ!」

「……………」
「殺して……………くれ」

遂にドーナシークは自分から死ぬ事を望み始めた。

「殺してやるよ!!」

隼人は右手を離し力を溜め、ドーナシークの胸を思い切り殴った。隼人の腕はドーナシークの体を貫通し、右手にはまだ動き続けているドーナシークの心臓が握られていた。

「……………」

「さっさと死ね。」

隼人が心臓を握り潰すとドーナシークはちりとなって消えた。

「はあはあはあ。」

「……………隼人。」

今まで黙っていたオフィスが話しかけてくる。

「はあはあ……………どうしたオフィス?」

「隼人、大丈夫?」

「俺は大丈夫だよ。っ!？」

オフィスがいきなり俺に抱きついてきた。

「どうしたオフィス? てか、血がつくから離れて。」

「いや。」

「どうして？」

「隼人、別人みたいだった。我、あんな隼人いや。」

この時気づいたがオフィスが少し震えていた。たぶん俺はオフィス達には凄く優しくかったからさっきみたいな一面を見て少し怖がってしまったのかもしれない。

「ごめんオフィス。もう大丈夫だから離れて。」

「うん。」

オフィスは離れてくれるが、その表情はまだ暗い。本当に怖かったんだろう。いつも知っている俺が全く別人みたいな行動をとったからね。なんとかして安心させてあげなければ。

「大丈夫オフィス！絶対にお前の前ではこんな事をしない。誓う。」

「いや。もうあんなにならないで。」

「……それは約束出来ない。俺は好きな奴があんな事をされて許せるほどお人好しじゃないんだ。だから約束出来ない。」

「……。」

オフィスは何も言わず俯く。俺はオフィスの頭を撫でる。

「けど大丈夫。オフィス達に危害が加わらない限り俺はいつもの俺だよ。心配してくれてありがとうねオフィス。大好きだよ！」

「ん。」

オフィスは気持ち良さそうに目を細める。本当にこの子かわいいな！いつもは無表情だから偶に見せる笑顔が凄い破壊力がある！
prprprしたいぜー！

「それじゃあ帰ろうか。」

「うん。」

俺はオフィスと手を繋いで自宅へと転移した。

家に転移すると、雪が俺に飛びついてきた。

「隼人大丈夫？怪我してたけど。」

「大丈夫だよ。ほらこの通り。」

俺は自分のお腹を雪に見せる。穴が空いていた場所は何事も無かったかのように綺麗だった。しかも傷の跡すら残っていないかった。それもそうだろう。自宅に転移する前に『復元する世界』で自分の体を24時間前に戻したのだ。それを見た雪はホッと胸をなで下ろし、

「隼人が無事でよかった。」

「しゅめんね。心配かけて。」

「ほんとに心配したんだから!」

雪は頬を膨らませて怒っているが、全然怖くもないし、むしろかわいいくらいだ。俺は雪に近づき、膨れた頬を指で押す。すると、ひゅるひゅるっと雪の口から空気が抜ける。なにこれめっちゃ面白い! もう一回やりたいなウズウズ

「もう! 私は怒ってるんだからね!」

そう言っただけで雪はポカポカと殴って来るが、痛くない。しかも顔を真っ赤にして怒っているのが微笑ましく見えて来る。俺は雪の頬を撫でる。

「ごめんごめん。本当に悪かったって。」

「全然謝ってるように見えない!」

「そんな事ないぞ! 本当に心配かけて悪かったと思っている。」

「じゃあなんでそんなニヤニヤした顔で言ってるの!」

「それは雪の頬を撫でてるからだ!」

「意味がわからないよ!」

「雪はいつもかわいいなって思いながら撫でてるからね!」

「うっ／＼／＼／＼」

雪は照れて反撃が出来ない様子だな。本当に雪はかわいい。何度

も何度も言っているが雪は一番かわいい。俺は雪を抱き寄せ耳元で、

「本当に心配かけてごめん。」

心から雪に謝った。雪もちゃんとそれを受け取ったのか。

「うん。」

それだけ言って俺を抱きしめ返して来る。

少しして俺たちは離れて、ミッテルトが寝ている部屋に行った。ミッテルトはまだ寝ているらしく起きていなかった。

「それでこの子は誰なの隼人？」

「最近仲良くなったミッテルトって言うんだけど。なんか上司の命令で俺を殺そうとしたんだけど、それを実行しなかったから殺されかけたんだ。」

「ふーん。また手を出したのね。」

雪がジト目で見てくるが、

「ま、いいけどね。」

雪はジト目をやめ微笑んできた。あれ？おかしい。いつもだったら嫉妬してくれるのに今日はしてくれない。も、もしかして俺の事嫌いになったのかな？こんな次々に女の子に手を出すからもう飽きられちゃったのかな？もう人生が終わった。雪のいない人生なんて考えられない。死のう。

「雪ごめん。俺が全部悪んだよね。」

「え？何言ってるの？」

「俺の事嫌いになっちゃったんだよね。こんなに女の子に手を出すから。だから嫉妬もしてくれ無くなっちゃったんだよね。ごめん雪の気持ちに気づいてあげられなくて。」

「隼人！」

雪が突然大声で俺の名前を呼ぶ。俺は何事かと思い雪のほうを見る。すると雪はさっき以上に怒っているようだった。さっきみたいなかわいい怒り方ではなく、本当に怖い怒った顔だった。

「いい隼人！私は隼人がどれだけ好きな人作ろうともう私は何も言わない！なんでかわかる？」

「え？俺の事嫌いになっただけから？」

自分で言ってる泣きたくなくなってきた。雪は俺のすぐ前まで来て、両手で俺の顔を抑えて俺の目を見てはつきり言った。

「違う！私は隼人が私の事が一番好きって言った事を信じているからよ！どんなに好きな人が出来ても私が一番って隼人が言ってくれたから私は安心出来るの。だから私は隼人が好きな人を作っても構わない。」

「雪……………」

「けど今の隼人はどう？全く私の事信じてないじゃない！あれだけ私

の事が一番一番言ってくれてたのに。あれは嘘だったの?」

「嘘じゃない!雪が一番好きだ!けど雪は俺の事どう思ってるのかあんまり聞かないから不安で。」

「そんなの好きに決まってるじゃない!」

「っ!」

「好きでもない人にキスなんてしないし、好きでもない人と一緒に住まない!ましてや一緒に寝ない!私も隼人が大好きなの!一番好きなの!もし今度そんな事言ったら本気で怒るからね!」

雪からこんなにはっきり好きだと言われたのは初めてだ。心が凄く暖かい。さっきまで疑っていた自分を殴りたい。ここまで自分を思ってくれてるなんて、本当に雪は俺の好きな彼女だ。これからは絶対に雪の信頼を裏切らない!俺はそれを心に決め、

「うん。約束するよ。俺も雪の事を信じる。ありがとう雪。それこれからもよろしくね。」

「全く隼人は……………んっ。」

俺達はキスをする。このキスはこれからもお互いが一番とういう誓いのキスでもあった。数秒がたち、俺達は唇を離す。お互いに微笑み合いながら手を握る。そんなやり取りを見ていたオーフィスは羨ましそうに隼人達をみていた。

「…ん……………」

ミッテルトが目を覚ました為、俺達はミッテルトのそばに行った。

「ミッテルト大丈夫か？」

「……はや…と…？」

「ああ俺だよ！」

俺はミッテルトの手を握り呼びかける。ミッテルトも徐々に意識を覚醒させていったのが、

「隼人よかったっス！」

そう言って抱きついてきた。俺も抱き返しながら頭を撫でる。

「大丈夫だよミッテルト。もう安心して。」

「よかったっス。本当によかったっス。」

ミッテルトは泣いてしまっていた。俺は背中をさすり、大丈夫大丈夫と言いつつ聞かせた。暫くしてミッテルトが泣き止み、話を始める。

「ミッテルト。まず体の調子は大丈夫？どこか痛むところはない？」

「大丈夫っス。隼人は大丈夫っスか？」

「俺の心配もしてくれるのか。嬉しいよ。俺は大丈夫！ほらこの通り傷なんて無いよ。」

「本当っス。はっ！そつえばドーナシークはどうしたっスか？」

「あいつなら殺したよ。当たり前だろ。ミッテルトに手を出したん

だ、殺すしかないだろ。」

「そうつスか。」

ミッテルトは少しだけ落ち込んだ表情を見せる。まあそつだろつ。前は仲間だったんだ、決して悲しく無い訳は無い。だが相手は自分を殺した奴だぞ。なんでそんな気を落とす。

「どつしてミッテルトが気を落とす。あいつはミッテルトを殺そつとしたんだぞー！」

「でも仲間だったつス。だから少しだけ悲しくつス。」

「ミッテルトは優しいな。」

「そんな事ないつス！隼人を殺そつとしたし。」

「けど殺さなかった。充分ミッテルトは優しいよ。けど優しい過ぎだよ。自分を殺そつとした奴にまで優しさはあげなくていいよ。」

「そうつスね。」

「うん。それじゃあ次にこれからミッテルトはどつする？」

「ウチはもう帰る場所がないつス。仲間の所にも帰れないつス。」

俺はミッテルトの言葉を聞き、雪とオフィスのほうを見る。二人も今から俺が言う事がわかったのか無言で頷いてくれた。本当に大好きだよ二人とも。ありがとつ。そつ思い俺は口を開く。

「帰る場所が無いなら俺の家に居なよー！」

「ミッテルトは驚いていたが、

「それは悪いっスよ！しかも私なんかと居るとまた襲われるかもしれないっス！」

「大丈夫だよミッテルト。俺はミッテルトと一緒に暮らしたいだけだし、もしまたミッテルトを襲う奴が現れたら俺がそいつを塵にしてやるから安心して。」

「うう。でも。」

「でもじゃない！これは俺からの命令だ！拒否権は無い！」

「わ、わかったっスよ！」

「うん。それでいいんだ。それじゃあ俺の家族の紹介するね。」

「家族っスか？」

「そう。雪、オフィスこっち来て。」

俺が雪とオフィスを呼ぶと「トコトコ」とやって来た。トコトコ走って来る二人もかわいいな prprしたい！………おっとこんな事してる場合じゃない紹介しなくては。

「「うちの黒髪の子がオフィス。」

「オフィス!？」

ミッテルトが驚き、その場から後ずさりをする。

「?そうだけど知ってるの?」

「知ってるも何も、最強のドラゴンっスよ!」

「へえオフィスってそんなに強かったんだ。」

オフィスの方を見るとえっへんと胸を張っているオフィスの姿があった。本当にかわいい

「それでこっちの白髪が雪。」

「雪です。よろしくね。」

「よろしくっス。」

二人は笑顔で握手をしている。なんか微笑ましいなこの光景。ずっと見ていたいや。

「それでこの雪は俺の未来のお嫁さん!」

「え!」

「エへへへへへ〜。」

ミッテルトは驚愕し、雪は顔がゆるゆるになっていた。

「隼人の未来のお嫁さんって事は、もしかして二人って付き合ってるっスか?」

「!」

ミッテルトは凄く悲しそうな顔をする。俺はミッテルトの気持ちを知っている。好きな人がもう付き合ってるのだから、ショックを受けるのは当たり前。俺はそれを踏まえた上でミッテルトに、

「ミッテルト。俺はミッテルトが俺の事をどう思っているのかも知っている。それを踏まえて俺と付き合ってくれないか？」

「え？」

「言ってる事が無茶苦茶なのはわかっている。けど俺もミッテルトが好きなんだ！絶対にミッテルトのことも幸せにしてあげる。他の子達と同じ位愛してやる。だから俺と付き合ってほしい。」

「……………」

ミッテルトは黙ってしまって何も答えない。少し時間が経つとミッテルトは俺の手を握って来て、

「本当にウチの事幸せにしてくれるっすか？」

「ああ誓う。神に誓って。」

それを聞いてミッテルトは顔を赤くしながらも、

「そ、それじゃあ……………よろしくお願いします……………」

「ああこれからよろしくなミッテルト……」

そして俺とミッテルトはキスをした。

こうして、俺の彼女と家族が1人増えたのだった。

俺って潜入捜査苦手なんだよね

ミッテルトが家族になって次の朝。いつもの時間に目を覚ましたのだが、いつものように両脇には雪とオフィスがあるが、何故か俺の上にミッテルトが乗っている。

「すう…すう…。」

ミッテルトがかわいい寝息をたてて寝ている。ミッテルトの寝顔もかわいいな！けどどうしよう。ミッテルトだけでも起こさないと準備が出来ない。俺はミッテルトの頬を軽く叩き、

「ミッテルト起きて。」

「んっ……………すう…すう…。」

「頼む起きてくれよ。朝ごはん作りたいんだ。」

頬を叩き続けているのだが、ミッテルトは熟睡しているらしく全く起きない。俺は悪戯がしたくなり、ミッテルトの耳元で、

「起きないとキスしちゃっぞー！」

「っ!?!……………スウ…スウ…。」

「なるほどキスをして欲しいのか。仕方ないな。」

俺はミッテルトの唇の近くまで唇を持って行き、触れるギリギリで止めた。

「流石に寝ているのにキスするのは可愛そうだな。」

「ん。……ん。…ん。」

「はあ可哀想だけど普通に起こすか。」

「キスしてっス！」

「おっとミッテルト起きていたのか。」

「知ってた癖に白白しいっス！」

「まあね。だって下手なためき寝入りをしてるのが凄く可愛くてね。ついからかいたくなってね。」

「ぐっ。隼人は意地悪っス！」

「そうでもないよ。」

俺はミッテルトの唇に触れるだけのキスをする。

「おはようミッテルト。」

ミッテルトは最初はびっくりしていたが、顔を赤くしながらも笑顔で、

「おはようっス隼人！」

そして俺達は雪とオフィスを起こさないように1階へ降り朝の準備を始めた。

6時くらいになり、雪とオフィスも起きてきたところで俺達は朝食を取ることにした。今日の朝食は味噌汁、漬け物、おにぎり、といった簡単なものにしてある。これはミッテルトも協力してくれた。これはまるで愛の共同作業だね。けど一番嬉しかったのはミッテルトが家事が出来ることだった。幼女二人は家事が出来ないから俺のいないあいだに家事をしてくれるのは嬉しい。だって休日しか、家の掃除が出来ないんだもん。凄く助かる。ミッテルトも快く受けてくれたし、ほんとミッテルトには頭が上がらないよ。

朝食を食べ終わり、食器を洗おうとするが、

「ウチがするから大丈夫っスよ！隼人は学校に行く準備をするっス！」

ミッテルトが俺を押しつけて食器洗いをしてくれた。こんなところもミッテルトはポイント高いよな。まだ幼いのにしっかりしてるっていうか。こんなところが本当にかわいい。俺は後ろからミッテルトを抱きしめる。

「な、なにっスか!？」

ミッテルトが顔を真っ赤にして狼狽えている。本当にかわいいな。ミッテルトは！俺はミッテルトを強く抱きしめ、

「ミッテルトありがとうね。俺はミッテルトを好きになって本当に幸せだよ。」

「っ……………」。

ミッテルトが顔から湯気が出るかと思つくらい顔を真っ赤にして

硬直してしまう。俺はミッテルトの首筋にキスを落とすとミッテルトの体がビクン！と跳ねる。それを見ていた雪は何かぶつぶつと虚ろな目で何か呟いていて、オーフィスは指をくわえて、物欲しそうな顔でこっちを見ていた。俺はそろそろ離れないと幼女二人に時間を取られると思いミッテルトから離れる。

「それじゃあミッテルト後はよろしくね。」

「……りよ、了解っす。」

俺はミッテルトにそれだけ言って学校へ行く準備をする。

「それじゃあ行ってくるね。」

「」「」「いってらっしやい」「」

三人に見送られながら学校に行った。

学校に着くとイツセーが俺の近くまで来て、

「隼人！お前は俺の彼女の事を覚えてるか？」

は？こいつは何を言ってるのだろう？散々自慢したじゃないか！

「覚えてるも何もお前が自慢してたじゃないか！」

「ほらみるー！やっぱり嘘じゃないだろー！」

イツセーが松田、元浜の方を向き言う。松田と元浜は俺の近くまで来て俺の肩に手を置く。

「あんな奴の妄想に合わせなくていいんだ。」

「あいつは二次元と三次元の区別がつかなくなったただけだ。」

「てめえらしい加減にしるよ！」

イツセーはそう叫びながら松田と元浜を追いかけて行った。すると廊下の向こうに血のように紅い髪の女性がこちらを見ているのが見えた。あの人はリアス・グレモリー先輩。駒王学園の二代お姉様として有名な人だ。イツセーもリアス先輩がこちらを見ている事に気づき鼻を伸ばしている。リアス先輩が少し微笑んでどこかに行ってしまった。リアス先輩は外国の人となっているが、何か人とは違う気がする。そう、サキユバスのような。

「まあどうでもいいが。」

俺はロリコンだからね。あんな年増は好きじゃないんだよ。しかも胸のあの脂肪なんなの？もう少し脂肪燃烧しろよ！まあそれは置いて、早く教室に入る。

今は昼休み。今日は中庭で食べようと思っ外に出る。外は暑すぎもせず寒すぎもせず、丁度いい陽気だった。俺は中庭のベンチを腰かけ、お昼ご飯を食べ始める。周りを見るとカップル達がイチャイチャしながら、ご飯を食べている。俺はそれを羨ましながら見ていると、

「先輩はカップルを見るのが趣味何ですか？悪趣味です。」

「小猫ちゃん俺はそんな趣味は無いよ！」

俺は声ができる方を向きながら言った。そこにはジト目で睨む小猫

ちゃんが立っていた。その手にはお弁当が握られていた。

「小猫ちゃんもお昼？良かったら一緒に食べない？」

「甘いものはありますか？」

「愚問だね小猫ちゃん！そんなの持ってるに決まってるじゃないか」

俺はそう言い懐からクッキーを出した。これは俺が朝作ったクッキーだ。このクッキーには野菜を練りこんでいる為、野菜嫌いの雪に野菜を少しでも食べてほしいと思いついたものだ！結構上手く作れたので美味しかった。雪もこれなら食べられると言って喜んでいな。

「わかりました。一緒に食べます。」

「それじゃあ隣にごつぞ」

「失礼します。」

小猫ちゃんはそう言って俺の横にちょこんと座る。小猫ちゃんが可愛らしいお弁当を開けると、なんとも美味しそうなおかずが並んでいた。

「小猫ちゃんその唐揚げ1個くれないかな？」

「じゃあそのミニハンバーグを下さい。」

「はい。」

俺は小猫ちゃんのお弁当箱にミニハンバーグを入れて唐揚げを貰おうとすると、手を払われ、

「ほら先輩。あ〜んです。」

小猫ちゃんがいい顔をして唐揚げを差し出す。これはされるのは嬉しいがこんな人目の付くところでやられると流石に恥ずかしい。

「ちょ、小猫ちゃん恥ずかしいからやめてー!」

「先輩もこの前やったじゃないですか。お返しです。それとも食べたく無いんですか?」

「ぐっ!」

この前とは、立場が逆転してしまっている。小猫ちゃんも少しは恥ずかしいのか顔を赤くしているが、この前やられた仕返しが出来て嬉しいのかいい笑顔だ!

「わ、わかった。食べるよ。」

「それではあ〜ん。」

俺は小猫ちゃんの唐揚げを口の中に入れる。美味しいのだが、恥ずかし過ぎてあんまり味の詳細までは分からなかった。いつもはやる側だったが立場が変わるとこんなに違うものなのだ。

「先輩顔真っ赤ですよ。」

「小猫ちゃんの所為だよ!」

「クスクス。それで唐揚げはどうでした？」

「美味しかったよ。あれって小猫ちゃんが作ったの？」

「はい。」

「そうなんだ。美味しかったからまた作ってよ！」

「気が向けば。」

「それをお願いするよ。」

そうして俺と小猫ちゃんの甘い昼休みは終わっていった。これにより俺と小猫ちゃんが付き合っている疑惑が一気に広まって行った。ちなみに変態三人組が俺に突っかかって来たのももちろん殴り倒した。

「ただいま。」

授業が終わり、帰宅すると、リビングから雪とオフィスが顔を出す。

「おかえり隼人」

雪とオフィスが俺の所に走って来て飛びついて来る。俺はそれに応じて雪とオフィスを抱きしめる。抱きしめっていると遅れて、エプロン姿のミッテルトが出迎えてくれた。

「おかえりっ 隼人！」

「ただいまみんな！」

なんかこの風景、俺がお父さんでミッテルトがお母さん、子供が雪とオーフィスっていう家庭みたいじゃない？こんな家庭もいいな。だが俺の一番嫁は、雪だ！すまないなミッテルト。俺は雪とオーフィスを離し、

「ミッテルト、エプロンしてるけど何か作ってるの？」

「そうっスー！今日はウチの自信作のカレーを作ってるっスー！」

「カレーか。いい匂いだね。ミッテルトが作ってくれたんだ楽しみにしてるよ。」

「じゃあちょっと待ってるっスー！」

ミッテルトは嬉しそうにリビングに戻って行く。俺も自分の部屋へ行き制服を脱いでリビングに戻ると、

「あ、イイところに帰って来たっスー！ちょっとお皿出してくれないっスか？」

「それくらい大丈夫だよ。」

俺はお皿を四人分出す。

「ありがとうっスー！後は大丈夫っスから休んでいてほしいっスー！」

「うん。それじゃあ後は頼むね。もしまた手伝って欲しかったら言うてね。」

「気遣いありがとうっスー！」

俺はそれを聞くと雪とオフィスの所へ行き二人を抱きしめながら、「ご飯が出来るのを待った。十分くらい経って準備ができた為、俺達はテーブルに着いた。」

「おお〜！」

雪とオフィスは2人声を揃えて呟いた。ミッテルトの作ったカレーは雪やオフィスが食べやすいように野菜を細かく切っており、しかも甘口という気遣いの見える温かいカレーだった。

「それじゃあいただきます。」

「いただきます。」

俺はカレーをひとすくいして口の中に入れる。

「凄く美味しいよミッテルトー！」

「へへ、ありがとうっスー！」

「ぐっ美味しい。」

「………………。ガツガツ」

俺がミッテルトを褒めるとミッテルトは顔が緩み嬉しそうに笑っている。雪は悔しそうにしながらも美味しいと言って食べている。オフィスは気に入ったのか無言で食べている。俺もゆっくりとだがカレーを食べている。この心のこもったカレーを噛み締めながら。

今日の夕食は笑顔が絶えなかった。

夜になり俺は魔力を発生させて訓練をしている。これは体に魔力を馴染ませる為に行っている。この前の戦闘で俺は思い知らされた。俺は平和ボケをしていると。これからは俺の家族に降りかかる火の粉を全て俺が払っていく。その為に更に今まで以上に強くならなくてはいけない。俺は誰にも負けない世界最強になるんだ！そう思い俺は馴染ませる魔力の量を上げていった。その魔力量はもう魔王クラスをゆうに超えており、オフィスの全力と変わらないくらいの魔力を体に馴染ませていた。

訓練を終えて自室に戻ると、ミッテルトが俺のベットで寝ていた。

「自分のベットがあるのに何で俺の部屋で。」

俺は頭を抱えながらも嬉しくて顔を緩める。そして俺はミッテルトに近ずき、キスをする。

「ミッテルトはかわいいな。……愛してるよ。」

それだけ言って俺もベットに入る。今日はミッテルトを抱き枕にして寝ようと思いきミッテルトに抱きつき眠りについた。

実はこの時ミッテルトは起きており、朝のためき寝入りのリベンジをしていた為、キスされた事も、愛してると言われた事も全部知っており、心の中で絶叫していた事は隼人は知らない。「」

「そんな俺はまだ夢でも見てるのか？」

俺がなぜこんな事を言っているのかと云つと、イッセーがリアス先輩と一緒に登校しているのだ！俺は信じられなくて頬をつねるが夢じゃなかった。それを見て悲鳴をあげるもの、倒れるもの、イッセーに殴りかかるもの、殴ったのは松田と元浜だな。けどなんでイッセーがリアス先輩と？まあどうでもいいが。俺はそのままイッセー達に関わらずに学校へ入って行った。

授業が終わり帰る構えをしていると、

「！！！！！！キヤーーーーー！！！！！！」

突然クラスの女子達が叫び出す。俺は何が起こったと思いを周りをみるとそこには、イケメンで有名な木場祐斗がいた。

「えっと君が兵藤一誠君だね。」

「なんのよつだよー」

イッセーが木場を睨見ながら言う。イッセーいくらイケメンが嫌いだからってそんなに邪険にしなくてもいいじゃないか！それを木場は気にしてないかのように笑顔で答える。

「リアス・グレモリー先輩の使いで来たんだ。」

「っ!？」

それを聞いたイツセーが何か心当たりがあるらしく体を震わす。
リアス先輩の使い？

「俺はどうしたらいいんだ？」

「付いて来てもらえるかな」

イツセーと木場と一緒に教室から出ていく。クラスの女子達が叫び、腐女子の奴等がはあはあ言っていたが今は無視だ！俺はあいつらをつけるぜ。なんか面白そうだし。

イツセーと木場の後をつけて旧校舎まで来ていた。その二階の奥の部屋に二人は入っていった。俺は二人が入って行った部屋の扉まで来て扉に耳を当てる。すると、

「……………いやらしい顔」

とうとう小猫ちゃんの声が聞こえた。あれ？なんで小猫ちゃんがこんな所に？その前にいやらしい顔？もしかしてイツセーか！まさかイツセーが小猫ちゃんにいやらしい事を!?あいつは死刑確定だ！そして俺は手に魔力を溜め、思い切り扉を殴った。

バキッ!!

俺が魔力を乗せて殴った事により、扉は砕け散った。

「……?」

その場にいた全員が驚いていたが、俺はそれをものともしないで、イツセーに乗りかかる。イツセーはバランスを崩し床に倒れこみ馬

乗り状態になる。

「てめえ小猫ちゃんにいやらしい事したのか！」

「え？なんの事？それよりなんで隼人が居るんだよ！」

「じゃかしい！お前は俺の小猫ちゃんに手を出したんだ殺されても文句は無いよな！」

俺がイツセーの腹に一発叩き込もうとすると首元にひんやりとした物が触れる。見てみると、木場が剣を握って俺に向けていた。

「動かないでね。動いたら容赦しないよ。」

木場が冷たく俺に言うてくる。俺はそれを手で掴み、魔力を込めて握り潰した。

「なっ!？」

木場は壊された事に驚いているようだったが俺は今そんな事してる場合じゃない！一刻も早くイツセーを殴らねばならないんだ！そして気を取り直してイツセーを殴ろうとするよ、

「先輩。」

「あ、小猫ちゃん大丈夫だった？もう大丈夫だよ俺が来たからには小猫ちゃんにいやらしい事する奴は俺が殺すからね。だからちょっと待っててね。イツセーを殺すから。」

「ちょ、ちょっと待てよ！誤解だから！」

「そんな言い訳聞くか！」

「イッサーを殴ろうとした時、俺の横腹を思い切り殴られた衝撃がはしる。見ると、小猫ちゃんが俺の横腹を殴っていた。俺の体結構鍛えているから女の子のパンチ喰らっても大抵は大丈夫なのになんで？」

「こゝ、小猫ちゃんいいパンチだね……一緒に世界を目指さない？」

「お断りします。」

世界への夢をあつさり断られ、小猫ちゃんが追撃で俺の顔面を殴り俺の意識は完全に刈り取られた。

次に目を覚ますと、手足を椅子に縛られていて全く身動きが取れなくなっていた。

「ようやく目が覚めたようね。黒羽隼人君」

俺は正面に座っている、リアス先輩を見た。あれ？なんかみんな殺気だってない？どうして？

「単刀直入に聞いわ。あなたは何者なの？」

「え？普通の人間ですが？」

それ以外答えられない。だって俺ちゃんとした人間だし。実はドラゴンでした。ってオチも無い普通の人だぞ。

「そんな訳無いでしょ！普通の人間がああ魔力で強化された扉を壊せる訳無いでしょ！」

え？今魔力って言った？もしかしてこの人達って実はミッテルトみたいな墮天使の人達かな？

「けど俺は普通の人間ですよ。ただちょっと魔法が使えるだけの」

「！！！！」

「隼人お前中二病だったのか！アハハハ。」

「よし、イツセーお前は後で殺すから覚悟しとけ。」

俺はイツセーを睨みつけるが、全く怖くないらしくまだ笑っている。クソ！俺は本当に魔法が使えるんぞ！しかもとびきりチートな魔法が！

「あなた魔法が使えるの？」

リアス先輩が驚いたように俺に質問してくる。これはやっぱりミッテルトのような人達なのかなこの人は。

「はい。使えますよ。この縄を解いてくれればイツセーを使って実演しますが？」

「なんで俺で実演すんだよ！」

「ほう。される心当たりが無いと。」

「すいませんでした。許して下さいー！」

「イツセーが土下座をして謝ってきた。まあ十発殴るだけで許してやるか」

「隼人心の声が漏れてる。てか十発って生々しい。」

「じゃあ死ぬ手前まで殴ってやるうか？」

「マジでぐめんなさい！」

「そろそろ話を戻していいかしら。」

「「「「すみません。」」」」

リアス先輩が青筋を立ててこっちを睨んでいた為とつさに謝ってしまった。

「それでその魔法を見せてもらいたいのだけど。」

「それじゃあこの縄を解いてもいいですか？」

「ええ。祐斗解いてあげなさい。」

「いえ、大丈夫ですよ。」

それだけ言って魔力で体を強化し、縄をひきちぎった。それを見ていたリアス先輩達は目を見開いて驚いていた。

「それが魔法なの？」

「いえ、まだこれは序の口です。本当の魔法はこれ。」

俺は自分が壊した扉の前まで歩き、『復元する世界』を発動させる。

『復元する世界』

俺が魔法を発動すると、一瞬で壊れた扉が元に戻った。

「『『え!』』」

これには全員が驚いていた。いいねその顔。面白い顔してるよあんたら。小猫ちゃんは驚いた顔もかわいいね

「黒羽先輩今何か余計な事考えませんでした?」

「気のせいだよ小猫ちゃん。」

なんで『うも女の子は感がいいんだろ?俺にはわからないよ!』

「それがあなたの魔法なの?見たこと無いけど」

まあそうだろうな。君達とは違う世界の魔法だからね。

「俺のオリジナルですからね。能力はあらゆるものを24時間前の状態に戻す能力。これを俺は『復元する世界』ダ・カーポ と言っている。」

「そうだったの。あなた私の眷属にならない?」

「眷属?それってどういう意味?」

「言ってなかったわね。」

そう言っつてリアス先輩の背中から蝙蝠の羽が生える。そして俺以外の全員が蝙蝠の羽を生やす。あれ？イッセーも？

「私達は悪魔なの！」

そう言っつてリアス先輩が胸をはる。イッセーはリアス先輩の胸に釘付けになるが、俺は小猫ちゃんの悪魔姿に釘付けになっていた。蝙蝠の羽が生えてる姿もかわいいね小猫ちゃんは

「上級悪魔は自分の眷属を持つことが出来るの。私はその眷属探しも兼ねてこの人間界にいるの。」

「なるほど。それで俺の珍しい能力が気に入って眷属にしたいと。そついつことだな」

「ええ、どう？悪魔になれば何万年も生きられるようになるわよ。」

「嬉しい誘いだけどそれは断るよ。俺は人間のまままで充分だから！」

まあ雪が多分俺の寿命弄ってるだろうと思っし、結局は同じ事だと思っしね。

「そつ………わかつたわ。気が変わつたらいつでも言っつて頂戴。」

「気が変わればね。」

まあ気は絶対変わらないがな。小猫ちゃんがどうしても言っつて言われたら考えるがね。

「貴方にはオカルト研究部に入っつてもらっつわ」

「え？なんで？」

「それはそうでしょう！貴方の力は野放しにする訳にはいけないわ。これでも私はこの領地を管理しているの。」

「それは困るー！」

流石に遅くなつては、雪達に心配かけてしまつ。それだけは絶対に避けたい！

「なぜよー！」

「帰りが遅いと俺の家族が心配しますー！」

「大丈夫よ！部活は深夜にするから。たまにでいいから出てくれたらいいから。」

「分かりました。偶にですが顔を出します。のでもう帰っていいですか？」

そう言つて俺は窓を指をさす。外はもう日が沈み暗くなつていた。

「ごめんなさい。もう帰つていいわよ。」

「それじゃあ失礼します。」

そうして俺は急いで自宅に帰つたが案の定、3人は心配心配しており、少しの間説教をされた。

リアス達に関わったことによりこれから隼人達は厄介事に巻き込まれて行くのだった。

バイサーに合掌をしてあげてくれ

俺がオカルト研究部に入部して数日が経ち、だんだんとオカルト研究部のみんなと慣れてきた頃、今俺は部室でイツセーが怒られているのを見ている。

「二度と教会に近づいちゃ駄目よ！」

イツセーはアーシアっていう女の子に出会って教会まで送ってあげたそうだ。けどイツセーって馬鹿だよな。わざわざ敵対している場所にこのこと行ってるんだもん。よく殺されなかつたな。リアスさんもすげー怒ってるしとりあえず合掌。

「ねえねえ小猫ちゃん」

「……なんですか？」

小猫ちゃんがジト目でこっちを見てくる。その目はよからぬ事をしようとしてるでしょと言つ目だな。

チツチツチツ。小猫ちゃんは甘いな。考えが甘すぎるぜ！そんな小猫ちゃんには甘いものあげないと、

「今日、モンブラン作ったけど食べる？」

「食べますー！」

小猫ちゃんが目をキラキラさせて俺の所に寄ってくる。

そんな物欲しそうな目で俺を見るな！俺も小猫ちゃんが欲しくなるじゃないか！

俺は手提げ袋からお皿とフォークとモンブランを取り出して小猫

ちゃんの前に置く。

「はい。どうぞ小猫ちゃん。」

「いただきます！」

小猫ちゃんはフォークを上手に使いモンブランを切り口の中に運び入れると、いつもの無表情が崩れ幸せそうな顔をしていた。

「どう？美味しい？」

「はい、美味しいです！」

「それはよかった。また今度スイーツを作ったら味見してくれない？」

「喜んで！」

小猫ちゃんは味見役が出来ることが嬉しいのかすごい笑顔で俺に笑いかけてくれている。

ズキューン!!俺のハートを射止めやがったな小猫ちゃん!その笑顔は反則だぜ!

俺は手を小猫ちゃんの頭に乗せ撫でる。

「小猫ちゃんは可愛いな！」

「またそれですか。………けど今回は多めに見ます。」

「くふ〜!小猫ちゃんはいつ俺の事を好きになってくれるのか………」

「たぶんなりません。」

「相変わらず敵しいね小猫ちゃん！けど絶対に諦めないからね！」

「そうですね。」

俺と小猫ちゃんとのイチャイチャはまだまだ先のようだ！気長にアタックするか。

俺は小猫ちゃんを撫でながらそう思った。小猫ちゃんは撫でられるのは満更でもないらしく、気持ちよさそうに目を細めていた。

その時周りは、

「なんである二人イチャイチャしてるの？」

「あらあら、うふふ。」

「僕もわかりませんね。」

「クソ〜！隼人奴爆ぜてしまえ！」

残りの部員達は二人のイチャイチャを見ながらブラックコーヒーが飲みたくなっていた。

それから暫く小猫ちゃんを撫でて、帰るごとしていると、

「部長。討伐の依頼が大公から届きました。」

「そう。わかったわー！これから行きましょう。」

リアスさんと朱乃さんが立ち上がり、『はぐれ悪魔狩り』に行くと言い出したが俺は早く帰らないと俺の嫁達に怒られてしまうので無視して帰ろうとするが、俺の腕を小さな手が掴んだ。しかも痛いぐらいに握り締めて。

俺は腕を掴んだ相手を見ると小猫ちゃんがジト目でこっちを見ていた。

「黒羽先輩どこに行くんですか？」

「いやね、もう暗いし早く帰らないと家族が心配するからね。」

「連絡すればいいじゃないですか。」

「門限が厳しいからね。それに俺が居なくてもなんとかなるでしょ。」

よし、これで帰れる。小猫ちゃんには悪いけど早く帰らないと最凶の嫁2人が怖いんだよ！分かってくれ。

すると小猫ちゃんが俯き、そして、

「どうしてもダメ？」

小猫ちゃんが涙目＋上目遣い＋今にも消えそうな弱い声の三ノンボでたたみかけてくる。やばいめっちゃ断りたいけど断れない。

「……………はあ……………わかったよ」

「ありがとうございます」

小猫ちゃんはそっきまでの涙目などをやめて笑顔で俺を見てくる。

(クソ！こんなかわいい事されて断れるわけないじゃん！小猫ちゃんなんて子！もう小悪魔感が半端じゃない。……はぁ…雪とオーフィス怒るだろうな……)

俺はそんな事を考えながらみんなと一緒に廃墟に向かった。

その頃黒羽家では、

「最近隼人帰りが遅くない？」

「隼人遅い。」

「遅いつスね。どこで油売ってるっスかね。」

「ねえみんなで隼人を探しに行かない？」

「我、賛成。」

「ウチも賛成っス！」

「見つけ次第連絡してね。みんなで説教してやるんだから！」

「うん。」

「了解っス！」

黒羽家のリビングで最強幼女2人と強くない堕天使が作戦会議をしていた。

「強くない言うなっス！」

墮天使ロリが叫びながら隼人散策の為3人は夜の町へと消えて行った。

俺達は今、はぐれ悪魔が居ると言われている廃墟に来ていた。そこは心靈スポットとして有名で、入って行った人は必ず帰って来ないとまで言われている。

「まさかそれが悪魔の仕業だったなんて」

「ん？どうしたんですか先輩？」

「いや、なんでもないよ。」

「そうですか。」

そう言って廃墟の中へと入って行く。中からは鉄の臭いがしていた。けどこの臭い、なんか血が乾いた時みたいな臭いがする。すると小猫ちゃんもそれに気づいたのが、

「……血の臭い」

そう言って小猫ちゃんは制服の裾で鼻を覆った。

やはり血の臭いだった。小猫ちゃんは断言したけど鼻がいいのかな？

すると廃墟の奥から何かがかっちに近づいて来た。

「不味そうな臭いがするぞ？でも美味そうな臭いもするぞ？甘いのかな？苦いのかな？」

そんな気持ち悪い言葉を発しながら悪魔がこっちに近づいてくる。

「はぐれ悪魔バイサー！貴方を消滅しに来たわ！」

リアスさんがまだ見えぬ悪魔に宣戦布告をすると、

ケタケタケタケタケタケタ……

と、さっきとはまた違う意味で気色悪い笑い声が廃墟の中に響き渡った。

暗がりから姿を現した悪魔は上半身が裸の女性で下が巨大な獣の姿で尻尾に蛇が付いている異形の姿だった。

はつきり言って気持ち悪い。有名なキメラを気持ち悪くしたみたいだ。しかも上が人型とかケンタウロス？とも思ってしまう。

「主の元を逃げ、己の欲求の為に暴れまくるのは万死に値するわ！グレモリー公爵の名において、貴方を消しとばしてあげるわ！」

リアス先輩がバイサーを指をさして宣言した。

決まったー！流石がリアス先輩。カッコつけるところはカッコつける。そこにシビれる、憧れるー！

「うざかしいー！その髪のように真っ赤に染めてやるー！」

そう言ってバイサーはドスドスと地響きを立ててこちらに向かってくる。

(いや〜この悪魔最大の死亡フラグ立てちゃったよ。)

俺はそんな事を思いながらリアス先輩の指示を待つ。ぶっちゃけ早く帰りたいので俺が倒してもいいが、返り血を浴びるのが嫌なので大人しくしている。

「雑魚ほどよく吠えるものね。裕斗！」

「はい…」

木場がリアス先輩の指示でバイサーに襲いかかる。

(へえ。結構速いんだね。まあ俺ほどじゃないけどね！)

俺がそんな事を思っていると、リアス先輩がイツセーに悪魔の駒の特性について説明し始めた。

「イツセー悪魔の駒にはそれぞれ特性があるの。裕斗の『騎士』は『騎士』となった者の速度が増すの。」

(なるほどだから木場はあんなに速いのか。)

木場はもの凄いスピードでバイサーの槍を躲していく。するといきなり木場の手から西洋剣みたいな剣が現れ、それを鞘から抜き放った。刀身は綺麗な銀色をしていて月の光に当たりキラリと光った。

そして木場は目にも止まらぬ速さで、バイサーの両手を切り飛ばした。

「ギヤアアアアアツツツ!!」

切り口から真っ赤な血がボタボタと落ち、バイサーの悲鳴が周りに響き渡った。俺はそれを見て、

(うわぁ、痛そう。)

なんて思っているとバイサーの近くに小猫ちゃんがいた。

するとさっきまで悲鳴をあげていたバイサーが小猫ちゃんに視線を向けて、

「小虫めええええ!!」

と叫びながら小猫ちゃんを踏み潰そうと巨大な足を振り上げる。

プチン!

「次は小猫ね。あの子の駒は『戦車』。その特性は……ってどこ行くの隼人!」

俺は魔力で体を強化し、小猫ちゃんのいる場所まで高速移動で向う。

途中リアス先輩が何か言ったがそんな事はどうでもよかった。今は小猫ちゃんを踏み潰そうとしている奴を殺さなくては!

そして小猫ちゃんの所まで来るともう足がすぐそこまで来ており、どう足掻いても逃げられそうに無かったが、

「おひゃあぁー」

逃げる気なんてさらさら無かった。俺は魔力を拳に溜めて、バイ

サーの足を殴りつけた。すると凄い衝撃が走り、バイサーの足が千切れ飛んだ。

「ギヤアアアアッガッ!」

「うるせーんだよ! 黙れ!」

俺は足が千切れ飛んだ事によりバランスを崩したバイサーの体に乗り、バイサーの首を締めていた。

「てめえ小猫ちゃんを踏みつぶそうとしたな? お前それがどんな事か分かってやってんのか? もし、小猫ちゃんの綺麗な肌に傷が付いたらどうしてくれるんだ! ああ? 何か答えるよ!」

もう完璧な不良口調でバイサーを攻める。

「ガッ……アッ……ガッ……」

「ちやんと喋ろよ!」

そうやって俺はバイサーの首を更に強く締める。

バイサーは喋りたくても隼人が首を締めていて話せなかった。バイサーは堪らず、尻尾の蛇で隼人を攻撃する。

「ちっ」

俺は舌打ちをしてバイサーから手を離し、その場から離れる。バイサーはやっと息ができるようになり、むせながらも肩で呼吸をしていた。

俺はもう一度右手に魔力を溜める。すると小猫ちゃんが俺の近く

にやって来て、

「先輩。ああ言ってくれるのは嬉しいのですが、私はあんな奴には負けません。」

「そうは言ってももし小猫ちゃんの綺麗な肌に傷が付いたらどうするんだい？俺はそれが心配で。それと嬉しいかったんだね。言っただけよかったよ！」

「本当に先輩は変態ですね。」

小猫ちゃんがジト目でこっちを睨んでくる。

そんな睨まないでよ。だって本当に傷が付いたら大変じゃない。こんな美少女に傷が付くなんて俺は絶対に許さない！」

「び、美少女ですか……………」

「あれ？言葉に出ちゃってた？それにしても照れてる小猫ちゃんもかわいいね。」

俺達は脇目もふらずにイチチャイチャしていた。

あれ？何か忘れてっているような？まあどうでもいいか！

「私の前でイチチャイチャするなあああ!!」

そう叫びながらバイサーが突進してきた。

だが、俺はバイサーを睨み付けて、

「今は小猫ちゃんといチャイチャしてんだ！邪魔すんじゃないわえええええ!!」

俺はバイサーの近くまで高速移動をし、今まで右手に溜めていた魔力でバイサーを殴りつけた。その魔力は絶大でバイサーを跡形もなく吹き飛ばした。

俺は高速移動して小猫ちゃんの所に戻り、

「ああ気を取り直してもう一度イチャイチャしよ？」

「……………」。

小猫ちゃんは無言で俺をジト目で見てくる。

そして周りを見て見ると、リアス先輩が頭を抱えており、朱乃先輩と木場は苦笑いを浮かべており、イッセーはぼかんと口を開けて硬直している。

「何この空気？」

「……先輩（貴女）（おまえ）のせいだよ！……」

「え？」

オカルト研究部みんなからツッコまれた。

「隼人のせいでイッセーに教えてあげられなかったじゃない！」

リアス先輩が子供のように怒っていた。

「すみません。ついカッとなってしまうました。」

「小猫はあれくらいで、傷は付かないわ！」

「すいませんでした。」

俺は土下座をして謝っているがなかなか許してくれない。そんなにイッサーに教えてたかったのだろうか？それだったらこの後にも教えたらいいのに。そんな事を思っていると、

「はあ。もういいわ。早く帰りましょう。」

やっと許しが出たので俺は土下座をやめて立つ。

(やっと終わった。なんでこんな年増に土下座しなくちゃならん。小猫ちゃんならいくらでもするがな！さてようやく帰れる。絶対怒ってるよな。あの三人。)

そんな事を思っていると、

「「「見つけた(っス)！」「」」

うっん。聞きなれた声が聞こえるぞ。

俺は錆び付いたロボットのようになぎなぎという効果音を出しながら後ろを振り向くと、たいそご立腹の嫁三人が立っていた。

オワタ＼(＾o＾)ノ

嫁さんは見た！

「見つけた(っス)！」

俺はギギギと音をたてながら振り向くとたいそう立腹の嫁三人が立っていた。

「隼人これはどうゆう事？」

「……………」

「説明するっス！」

嫁達が目に光を宿して無い状態で睨んでくる。俺は少し後ずさり、逃げようとするが、

「どっ行くの？ねえどっ行くの？」

いつの間にか移動していた三人が俺の腕を掴み、聞いてくる。もちろん光が宿って無い。

(ヒィィィーやばい、病んでらっしゃるこの嫁達。た、助けてー！)

俺はすぐさま土下座をして、

「すいませんでしたああああっ！」

もう顔を地面にこすりつけて謝った。すると雪が、

「隼人顔をあげて」

「雪……」

雪が笑顔で俺に顔をあげてるように言ってくれた。俺は雪の優しさに触れ嬉しくなり顔をあげる。雪はそつと俺の顔に手を伸ばし頬に触れる。そして、がちりホールドしてきた。それも痛いくらいに。

「ゆ、雪さん？」

「ん？」

「い、痛いのですが」

「あれぐらいで許してもらえる思った？」

雪が凄い笑顔で笑いかけてくれるんだが、その目に光が宿って無かった。

「で、ですよね……」

「大丈夫。死にはしないわ。ただ……」

雪はそこで言葉を切る。俺はなんとなく後の言葉がわかるが念の為聞いてみる。

「ただ？」

「死にたいと思うくらいの苦痛を与えてあげる」

「……………」

雪の言葉に賛同するかのように後ろでミッテルトとオーフィスが頷いていた。俺は言葉を失い、雪に引きずられていた。

今まで、ポカソツとしていたオカケンメンバーははっとなり、

「ちょっと待ちなさいー！」

雪達を取り囲むように戦闘態勢を取る。雪達はそれを冷たい目で睨む。

「貴女達は隼人をどうしようとしてるのかしら？それに墮天使も居るようだし、もしかして貴方達が最近この町でいろいろしている墮天使の仲間だったりするのかしら。」

「……………」

雪は何も言わずリアス先輩を睨みつけ殺気を出している。オカケンメンバーは更に警戒を強め魔力を滲み出している。

「雪達もリアス先輩達もそこまでですー！」

俺は雪とリアス先輩の間に入り仲裁に入り戦闘を辞めさそうとするが、雪は戦闘態勢をとかなかった。俺は雪の頭を撫でて落ち着かそうとする。

「……………わかった」

雪は不服ながらも戦闘態勢をといた。

「ごめんなさいリアス先輩。明日説明しますので今日は帰りますね。」

雪達も今日説明するから今日は帰ろっ。」

「……わかった」

「わかったわ。必ず説明しなさいよ！」

「わかりました。でも今回は俺のせいでもこんなになりましたけど、今度また雪達に剣を向けたら……皆殺しにしますから。そのつもりで。」

俺はそれだけ言って雪達と一緒に自宅へと帰っていった。

リアス先輩達は俺の残した言葉と殺気に震え、少しの間その場を動けずにいた。

黒羽家では今、正座させられてる俺と、嫁三人による尋問会が開催しようとしていた。

「隼人」

「はいはい……」

声が裏返ってしまい、体をガタガタと震わせて雪達の顔色を伺ってみるが、その顔はどれも「ミ」を見るような目で睨んでいた。

「何か言い訳はある？」

「言い訳して言い訳？」

「ゴキッ！」

「ギヤアアアア」

場を和ませようと冗談を吐いたが、ミッテルトによって腕の関節を外された。俺は激痛のあまり絶叫しのたうちまると。雪達はそれを冷やかな目で見るだけだった。

「そんな冗談が言える状態だと思っているの？」

「すいませんでした！」

俺は土下座をして謝るが、雪は俺の頭を踏みつけてきた。

(雪の足が、プニプニして気持ちいい)

もう少しでMに目覚めそうになりながらもなんとか堪え雪達に説明をした。もちろん踏みつけられた状態で。

その間にオーフィスとミッテルトに蹴られたり、肩を外されたり、関節技をかけられていた。

「なるほど。最近帰りが遅かったのはその悪魔達に正体がばれたからなのね。」

「しかもばれた理由が、勘違いで隼人の狙っている子を助けようと魔

法を使ったからっすか。」

「隼人、バカ」

「返す言葉もないです……」

俺の説明を聞きやっとな足を退けてくれた。だが俺は正座のまま座っている。崩そうとすると鋭い睨みを突きつけくるのだ。

「それでなんでその事を黙っていたの？」

「そ、それは……」

「もしかしてあの悪魔達に口止めされてたの！あの悪魔達抹殺してやる！」

雪が殺気をバンバン出し、その後ろでは殺気を出しながら準備体操をしているミツテルトと魔力と殺気を溢れさせて立っているオーフィスの姿が見えた。

今からオカケンメンバーを抹殺しに行くかのようだったので俺は慌てて止める。

「違つから口止めされてないから！だからそんな殺気だないで」

「じゃあなんなの？」

「それは……オカケンメンバーに気になる子が居るから一緒にいたくな〜と思っていただけ。けどそれ言ったら雪達が止めるかな〜って思ったので言いませんでした。けど雪達が嫌で家に帰らなかった訳じゃないからそれは分かってください。」

「はあ、そんなことだろうと思った。」

雪はため息をついた。そして俺に抱きつき、

「わかった。許してあげる。隼人は直ぐに他の子に手を出しちゃうのはもう慣れたし」

「許してくれるの？」

「ええ。けど今度から私達もそのオカルト研究部に行くことにするから。それじゃないと隼人と一緒に居れないし。」

「わかったよ。じゃあ明日みんなを紹介するから、呼んだら来てね。」

「うん。」

俺はなんとか許してもらい、明日オカケンメンバーに雪達を紹介するということに落ち着いた。

「じゃあ最近あんまり一緒にに居られなかったから今日はみんなといっぱいイチャイチャしようね！」

「うん。うん。」

そうして俺達はイチャイチャして過ごした。

それはもう長い時間イチャイチャしていた為、寝たのは夜中の3時になってしまった。

もちろんいつも通りに起きたのだが、眠すぎて朝ごはんを少し焦がしてしまった。

授業が終わり、今は放課後。

昨日の説明をする為にオカルト研究部の部室まで足を運んだ。扉を開けると、オカケンメンバーは全員集まって居るようだった。部室の中は俺が入って来たことにより、ピンと空気が張り詰めている。

「それで昨日の事を話してくれるんでしょうね」

重々しい空気の中リアス先輩は口を開き昨日の説明をするようにと言ってきた。俺はソファーに座り、リアス先輩と対面する形となった。

「もちろんです。その前に雪、オフィス、ミッテルト」

俺がそう言うと三つの魔法陣が部室の中に現れる。リアス先輩達は警戒をしたが、俺の殺気により手を出せないでいた。

魔法陣から雪達が現れて、

「隼人ー！」

雪がいきなり俺に抱きついてきた。これにはリアス先輩達も呆気にとられてポカンとしていた。1人を覗いて。

「は、隼人が遂に小学生にまで手を出したー！」

イツセーが発狂したように叫んだ。まあ絵面としては確かにそう見えてしまうが多分雪の年齢って………これは考えないでおこう。あまり女性の年齢を聞くものじゃないからね。まあ雪は所謂合法口

りというやつだ。

雪はイツセーの方を向き、

「私小学生じゃないし！何勘違いしてるの？キモイし死ね！」

イツセーに向かって暴言を吐いた。しかも目がマジだった。イツセーはそれを聞いて膝から崩れ落ちてしまった。それほどショックだったんだろう。

「雪、言葉遣いが悪いよ。例えそれが気持ち悪くてどうしようもない相手だったとしても雪はそんな言葉遣いをしてたらダメだよ！その前にイツセーに話かけちゃダメだよ穢れちゃうから。」

「うんーあんな蛆虫野郎とはもう話さない！」

俺は雪の頭を撫でながら注意をし、雪もそれを理解してくれたのが笑顔で頷いてきた。俺は雪が可愛すぎて雪を抱きしめた。雪も抱きしめ返して来てくれて最高の気分だった。

だが、

「いつまでイチャコラしてるっスかぁ！」

すばばーん！

ミッテルトがいつの間にか出したハリセンで俺と雪の頭を思い切り叩いた。俺達は頭を抑えながらミッテルトに、

「ミッテルト痛いじゃないか」

「痛いよミッテルト」

「痛いじゃないっス！ここに何しに来たんっスか！」

「え？雪とイチャイチャ？」

ずばーん！！

頭に雷が落ちたかと思うぐらいの衝撃がきた。

「ミッテルト今のは流石にやばいよ」

「隼人が巫山戯るからっス！私達を紹介しにここに来たんでしょう？それだったらさっさと紹介するっス！」

「ちえっ、ミッテルトはノリが悪いな。」

「もう一発くらっつスか？」

「いえ、結構です。」

俺は雪を離し、リアス先輩達を真剣な眼差しで見直す。リアス先輩もそれがわかったのか真剣な目で見返してきた。

俺はまずミッテルトを呼び隣に座らせる。

「1人1人説明します。こっちの墮天使はミッテルト。イツセーを殺した墮天使の元仲間です。」

「っ！？」

イツセーは驚愕の顔を浮かべ、リアス先輩は睨むようにミッテルトを見る。ミッテルトも少し気まずそうな顔をして俺の手を握ってくる。俺はその手を握り返しリアス先輩を睨む。

「確かに前はその墮天使の仲間でしたが、今はなんの関わりも無いです。」

「それを信じる証拠はあるの？」

「このミッテルトは仲間にも1回殺されかけています。」

「っ!?!…………それはどう言った理由で？」

「…………ミッテルト言っていていいか？」

「…………大丈夫っス」

ミッテルトはそう言って手を強く握ってくる。

思い出したく無いのだろう。俺を殺そうとした事、仲間にも殺されかけた事も。

俺もそれに答えるように強く握る。

「ミッテルトは仲間から俺を殺せと命令を受けていた。それでもミッテルトは俺を殺さなかったんだ。それをあいつらは命令を実行しなかったミッテルトと俺をまとめて殺そうとしたんだ。それが殺されかけた理由だ。」

「そう…………貴方はなぜ隼人を殺さなかったの？」

リアス先輩はミッテルトを見る。

それを聞いたミッテルトは顔を赤くしながら、

「そ、それは………やっぱり言えないっス！」

そそう言っつてミッテルトは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

リアス先輩もミッテルトの行動を見てわかったのか、なるほどと呟いていた。

「ミッテルトはそれから俺達と家族になって今は楽しく過ごしています。だからあの墮天使とは今は一切の関係はありません。これで信用してもらえますか？」

「ええ信じるわ。それとさっきは疑って悪かったわね。」

そそう言っつてミッテルトに頭を下げる。

それを見たミッテルトは慌てて、頭を下げる。

「頭をあげてほしいっス！元は私達のせいで迷惑をかけてますし、こちらが謝らなければいけないっス。本当にすいませんでした。」

少して両者は頭をあげる。そして微笑みあっていた。どうやら和解出来たみたいでよかった。

「よかったなミッテルト！」

ミッテルトの頭を撫でて笑いかける。

ミッテルトも嬉しそうに笑っていた。

そして次にオフィスを呼んで座らす。

「「こちらはオフィス。俺の家族だ！」

「オーフィスってあのオーフィス？」

リアス先輩は慌てたように聞いてくる。

「多分当たってます。最強のドラゴンのオーフィスです！」

「我、オーフィス。」

オーフィスの名を聞いてイッサー以外のオカケンメンバーが驚いていた。

「部長あの子ってそんな強いんですか？」

「ええ。神すら恐れたくらいよ。」

「えーーーーー！あんなに小さいのに」

「イッサー。強さは大きさを判断したら駄目だ。まだお前には分からないかもしれないが、強者は纏っている魔力が違う。オーフィスは無限の龍神って言われていて魔力は無限なんだ。だからお前が逆立ちや突然変異したところで勝てないんだよ。勿論このオカケンメンバーも同様に。」

俺はオーフィスを撫でながらオカケンメンバーにオーフィスの力を自慢してみた。イッサーは叫びながらオーフィスを見ていた。

俺は次に雪を隣に座らせる。

「こちらは雪。俺の家族です。」

「どいつも皆さん。黒羽雪です。」

雪は軽くお辞儀をして、オカケンメンバーを見る。そして小猫ちゃんを見てジト目になる。小猫ちゃんも何故かジト目へと変わり睨み合っていた。

「雪どっした？」

「別に…」

そう言ってそっぽを向いてしまう。

何故だ？

「それでその雪って子は貴女の妹さん？」

「義理の義妹です！」

「隼人の将来のお嫁さんです！」

「え!?」

雪が核爆弾を投下してしまった。

(Oh n n o o o o o o o o o o o o o o o o o)

俺は心の中で絶叫し、雪の顔を見る。雪はやってやったって顔をしていた。やめて雪さん。これじゃあ俺は義妹に手を出す変態と思われるじゃないですか！なに？もうロリコンで、充分変態だ！だって？これ以上変態の項目を増やしたくないんだ！ロリコンで義妹に手を出す変態って学校に知れ渡ったら俺もっ学校行けない！

だが真実な為否定ができない。

「え、えっと……それは本当なの？」

「……ちが『そうです！』……そうです」

「私達は愛を誓い合っています！隼人が結婚出来る歳になったらすぐ入籍するつもりです ねえ隼人」

「入籍は聞いてな『ねえ』……はい……」

雪は俺の腕に絡み付き、勝ち誇った顔で言ってくるが、何故か怖い。そして、

「……………」

小猫ちゃんがさつきから汚物を見るような目でこっちを見てくる。小猫ちゃんそんな目で俺を見ないで!!俺のライフはもうゼロよ!

「えーと…お幸せに」

リアス先輩が顔を引きつらせながらそんな事を言ってきた。雪はそれを聞き嬉しくなったのか俺の腕を強く抱き締め、

「はい。幸せになります」

雪さんなに言ってるの？ほら、そんな事を言うから小猫ちゃんがこっち見てくれなくなったじゃないか！雪もつやめて。これ以上傷口に硫酸かけるのやめて。これ以上は死んじゃうー!

「雪ちよっと黙っててもらえるかな？」

「なんで？」

「これ以上この場の空気をカオスにしたくないから。」

そうさつきから、リアス先輩は頭を抱え、姫島先輩と木場は苦笑い、小猫ちゃんは目すら合わせてもらえず、イッセーに至っては血の涙を流し、ミッテルとオーフィスは羨ましそうにこっちを見ている。

なんとか立て直したいがもう無理な位置まで来ていると思う。もうどう修整したって俺のダメージは絶大って事が確定してしまっている。つまり

＼(＾o＾)ノオワタ

俺の人生はもうお先真っ暗だ！一生変態のレッテルを貼られて過ごさなければならなくなってしまった。

俺は立ち直れなくなり頂垂れる。

「まあ、そういう事なんで」

「え、ええ。こちらも敵じゃないとわかったから。」

俺達は気まずい雰囲気の中話を進めた。その間も雪は俺に抱きついていて、最終的にオーフィスまで抱きついてきた。凄く嬉しいが、小猫ちゃんの目線が痛い。まるで刺し殺すような目線で睨んでくる。

それからの少し話し合い、雪達を部屋に来てもいい事にしてもらった。それから話し合いが終わり、小猫ちゃんに話しかけると、

「い、小猫ちゃん……」

「……………」

目も合わせてもらえず、無視までされて、俺の心はもうブレイクし
そうだった。

「小猫さん……………」

「話しかけないでくださいゴミ野郎。」

「ぐはっ!!」

隼人 HP (ハートポイント) 4000

隼人は小猫ちゃんのダイレクトアタックにより3999のダメー
ジ

隼人 HP (ハートポイント) 1

「小猫ちゃん今度飛び切り美味しいスイーツを作っ
て来るから!」

「ゴミ野郎が作った汚物なんて食べません!」

「しほっ!!」

隼人 HP (ハートポイント) 1

隼人は小猫ちゃんのゴットハオドスマッシャー(物理)をダイレク
トにくらい10000000ダメージ

隼人は精神的にも肉体的にも小猫ちゃんに折られてしまった。

それでも諦めずに話しかけて、今度この町で一番高いスイーツを奢ることだなんとか機嫌を直してもらった。

それから俺達は自宅へ帰り、雪の説教をして、一緒にお風呂に入り、一緒にベットインした。

ん？一緒にお風呂入ったのか！だって？勿論だろ！三人仲良く入ったよ！何が悪いんだよ！イチヤイチャして何が悪いんだよ！勿論エロいことは……………してないぞ！

イチヤイチャしていた為気づかなかった。窓の外から俺達を見ていた白い猫がいた事に。